

青柳：ここでは南方といってもフィリッピンやインドはお2人の先生方にお任せして、私はこれまで自分のフィールドとしてきたミクロネシアの島々を取り上げていきたいと考えます。

（1）南進論

日本からみて南方というと、ミクロネシアは最も近い地域ではありますが、日本が軍事的、経済的にミクロネシアを含む南方地域に進出し、ヨーロッパ人による帝国主義的領土拡張に歯止めをかけるべきであるという議論は、明治時代から識者の間で叫ばれていました。

その1人としてたとえば田口卯吉（1855—1905、経済学者、歴史学者、衆議院議員）は、明治23年（1890）東京府から士族授産金の寄託を受け南島商会を設立し、帆船天佑丸に乗船して南洋に巡航貿易に出かけました。ポナペ（現ポンペイ）に南洋商会の支店を設け、これは最初の南洋関係の商社となりました。彼は「南方経略論」（『東京経済雑誌』21—513：351-353〈1890〉）に次のように述べています。

如今南洋諸島の事情は稍稍世人の注目する所となれり、然れども未だ1人の鎮西八郎なく、1人の山田長政なし、是れ余輩の私に惜しむ所なり、中略

凡そ赤道直下に位せる土地は大約豊饒にして珍禽奇獣名木宝石に富み、且つ海産物豊かなるとは人の知る所なり、而して余輩の聞く所に因れば南洋諸島実に然るか如し、彼のハワイに於て我移住民の利を得るを見ずや、南洋諸島は実にハワイに異ならざるなり、而して其土地の所有権未だ定まらざるもの実に多く、既に定まるものと雖も之を得ること実に容易なり、我4千万の同胞は既に国内に於て遺利なきに苦しめり、我余分の人民を駆りて此豊饒の地に注ぎ、以て南洋経略の地を為す亦た可ならずや。（矢野暢 2009：324～325）

また時間的には少し後になりますが、南進論の主導者の1人で南洋協会を設立し、南洋事情に精通した人材の育成を図った井上雅二（1877—1947、海軍兵学校、ウィーン大学、衆議院議員）も、1915年『南洋』（富山房、大正4年）という書物の中で南進は自然であり、日本人は南方の血を引いているが、それは日本人を侮辱するものではなく、人種学者の説くように種々なる血を引いてこれを醇化させるのが優秀国民であることはアングロサクソンを見れば明らかである。南洋人の血を受けた「日本人が未だに未開の間に彷徨うている南洋人をこのままにして置けるであろうか。彼らを指導し開発し自他の幸福を増進するは所謂王道を蕃夷にも布くもので、神武以前の故郷に帰るといふ愉快的意味を含んでゐる。この見地から我民族の南進は何物を拒むことはできない。中略 南進は必要である。自然である。絶対である」（矢野暢 2009：331～332）と述べています。

しかしこれより早く有名な事件は、1884年（明治17年）マーシャル群島で漂流日本人が殺害されたという事件がありました。この報がもたらされた為、政府は後藤猛太郎（後藤象二郎の息子）と鈴木経勲（つねのり）の2人を派遣し事情を調査させました。2人は大酋長に逢って謝罪させ、2人の小酋長を伴って帰国しましたが、寒さのため小酋長2人ともすぐに死亡し

てしまったそうです。その訪問時、後藤と鈴木はこの島が日本の領土であるとして日章旗を立てて来たので、時の外務卿井上馨は激怒して、翌年 1885 年再び彼らを派遣してその旗を降ろさせたというそうです。それが 8 月のことで、同年 11 月にはドイツがマーシャル群島を占領して自国領としました。そのため考えようによっては、この事件は日本の南進論実行の絶好の機会であったかと思われませんが、何故か日本政府は動かなかったようであります。

鈴木経勲はその後もしばしば南洋の航海を行なったりしく、天佑丸にも乗船しております。彼には『南洋探検記』(1892)、『南洋巡航記』(1893)、『南洋風物誌』(1893)の著書があり、日本人による最も早い南洋民族誌であると高く評価されていますが、高山純は『鈴木経勲—その虚像と実像』(1995)という大著の中で、経勲の記述を詳細に検討し、誤りが多いと指摘しています。そして日本の国旗を王の家に高く掲揚したというのも、嘘ではないかと述べています。何故ならば、マーシャル群島にはすでにキリスト教宣教師や貿易商人たちが活動していたにもかかわらず、そのような事実は外国人の記述には見当たらないようであります。

(2) ドイツ領植民地の占領と国際連盟委任統治

ミクロネシア、すなわち当時の言葉で言えば南洋群島に多くの日本人が関心を持つようになったのは、第 1 次大戦によって、それまでドイツ領であったこれらの島々を日本海軍が占領して以降のことでありましょう。

ドイツ領と申しましたが、ミクロネシアの島々の歴史は複雑です。東部のマーシャル群島は、1885 年以來ドイツ植民地となっておりましたが、北のマリアナ群島は 16 世紀以降スペインの支配下にあり、カロリン群島は 18 世紀後半からイギリスの影響下にありました。しかしカロリン群島でスペインとドイツの領有争いが起き、ローマ法王の裁定で、スペインの植民地となることが決定したのが 1885 年です。しかしその 14 年後の 1899 年、米西戦争の結果スペインは財政が悪化して、ミクロネシアの島々をドイツに、またマリアナ群島内のグアムをアメリカに売り渡してしまいました。

第一次世界大戦当時日本はイギリスとの間に日英同盟を結んでいたために、イギリスの求めに応じて日本海軍は 1914 年 10 月 3 日この海域に軍を進め、10 月 14 日までの僅か 11 日間に、マーシャル群島からマリアナ群島まで無血占領しました。日本はイギリスの求めに応じるに当たって、ドイツ植民地の終戦後処理について、赤道以北を日本領とする事を内密に交渉していました。しかし戦後になって、戦勝国が敗戦国領土を取得することにアメリカから異論が出され、国際連盟による委任統治という方法が提案されました。イギリスもそれに同意したので、日本も受け入れることとなり、1919 年のヴェルサイユ条約により、これらの島々は国際連盟の C 式委任統治となり、日本がその受任国となりました。

国際連盟委任統治というのは、A,B,C の 3 種に分けられています。A は文明化が進んでおり自立が可能ということで、受任国とは別の国籍が与えられます。B は文明化が遅れており、自立は当面不可能、C は文明社会から遠く離れ、住民のレベルは低く独立はまず不可能という分類です。B,C 式ではいずれの国籍も与えられず、受任国には奴隷売買の禁止、酒や武器の販売禁止、軍事基地の建設禁止、先住民への軍事教育の禁止、信仰の自由の保障などの規定はありますが、事実上植民地と同様の扱いでよいと日本は解釈し、これを受け入れることにしました。C 式はドイツ領南西アフリカ、ドイツ領ニューギニア、ドイツ領サモア、ナウル、そしてドイツ領北太平洋諸島（ミクロネシア）です。矢内原忠雄は「受任国領土の構成部分としてその国

法の下に施政を行なうべきものと定められ、受任国の単純な領土ではないが、最も領土たるに近き性質を有するものである」(『南洋群島の研究』1935 : 38) と述べています。

南洋群島における日本人人口は 1914 年占領当時 70~80 人でありましたが、その翌年には 220 人を越え、以後毎年増加して大正 9 年 1920 年には 3671 人を数えるまでになりました。日本は占領時から暫くの間は、南洋群島防備隊、やがて海軍民生部によって統治していました。やがて委任統治領としての体裁を整え、南洋庁の施政体制が発足するのは 1922 年のこととなります。

(3) 3人の芸術家

南洋の土人は、文明の光に浴していない遅れた人びとであるという一般的なイメージは、当時の日本人の多くが抱いていたものであったでしょうが、それは裏を返せば一方で文明に汚されていない原始芸術への憧憬とも繋がったと思われれます。南洋群島が日本の委任統治領になったということで、南の島々が日本人にとって身近なものになって行きます。

ここに示すのは土方久功、杉浦佐助、儀間比呂志という 3 人の、南洋群島に魅せられた画家を中心に世田谷美術館が展覧会を行った時の貴重なカタログであります。

時に日本のゴーギャンと呼ばれる土方久功がパラオにやってきたのは、1929 年 3 月 29 歳の時でした。彼の父の兄は明治政府で農商務大臣、宮内大臣を務めた土方久元伯爵、母の父は海軍大臣で男爵という上流家庭に生まれ、学習院を卒業しています。彼は自分の南洋行きを寒いところが嫌だからという言葉で表現していますが、日本の古代文化を学ぶうちに、南洋に行き着いたそうです。理由はよくわかりませんが、この頃日本は次第に国粹主義の風潮が強化されており、日本が嫌になったのかもしれませんが。ちなみに築地小劇場でプロレタリア演劇活動をしていた父方のイトコ土方与志も 1933 年に検挙されています。土方は南洋庁の嘱託となり、パラオ人児童に彫刻を教えることとなりました。彫刻は現在パラオでイタボリと呼ばれ、ヒジカタ先生の名は今も伝えられています。

やがて土方の元を訪れた 1 人の青年がいました。それが愛知県の宮大工で 1917 年南洋群島にやって来た杉浦佐助であります。1917 年といえばヴェルサイユ条約以前で、まだ南洋群島は海軍民生部の統治下にあった頃でありますから、杉浦はごく初期の移民ということになります。土方は彼の語学力を認め、民族的調査の通訳となることを条件に、杉浦とともに生活するようになります。

土方はやがて日本人の多いパラオのコロールを避けて、杉浦とともにヤップ島の離島であるサタワル島という人口 300 人の孤島に移り住み、7 年間暮らします。その間に杉浦は土方から本格的に美術を学び、木彫りを製作したそうです。1939 年杉浦が一時帰国した際に東京で発表したところ、予想以上の反響があり、高村光太郎は「南洋の土地から出なければとても生まれないと思われる原始人の審美と幻想に満ちた恐るべき芸術的巨弾」(『芸術家たちの南洋群島』2008 : 146) と評したと言われます。

やがてこの年土方はコロールへもどるが、杉浦はパラオには戻らず、マリアナ群島のテニアン、ロタ島に生活の居を移します。

沖縄の版画家儀間比呂志は 1923 年生まれ、40 年に沖縄を離れマリアナ群島のテニアン島にやって来ました。すでに日本は中国との戦争を始めていましたが、マリアナ群島には多くの沖縄県人が居住し、主としてサトウキビの生産に従事しておりました。偶然訪れたロタ島で、儀

間は杉浦に会い、彼の弟子となります。2人は岩穴の中のアトリエで彫刻に励みますが、1943年儀間に召集令状が来て、沖縄に帰ります。一方杉浦はマリアナ群島のテニアン島に移動したようですが、1944年アメリカ軍がこの島に上陸し激戦地となったため、投降して米軍のキャンプに入ります。その後、日本兵に投降を呼びかける米軍兵士と行動をともにしていた折に、日本兵に撃たれ死亡してしまいます。残念ながら、杉浦の作品はほとんど残っていないそうです。

この3人の画家・彫刻家は南方に生の根源を求め、それをより力強く現す対象として、ミクロネシア人を見ていたのであろうと思います。しかし南洋が文明に汚されない楽園であるという幻想、そしてそこに住む人々は、日本人より文明の遅れた人々であるというイメージは、当時の日本人の中に抜きがたくあったのではないかと思います。

こうしたイメージをより身近なレベルで日本社会に広めた1つが「冒険ダン吉」です。これは島田啓三による漫画で1933年から『少年倶楽部』に連載され、ダン吉が南の島で蛮公を征服しその王となるという物語は、子どもたちの人気を博したそうです。このモデルとなったのは、トラック島（現チュルク島）にスペイン時代に移住し、首長の娘と結婚してこの地の有力者となった森小弁であるといわれています。また石田一松作詞作曲の「酋長の娘」もこうしたイメージを作り上げるのに大きな役割を果たしたといえるでしょう。「私のラバさん、酋長の娘、色は黒いが南洋じゃ美人、赤道直下マーシャル群島、ヤシの木陰でテクテク踊る、踊れ踊れ、どぶろく飲んで明日は嬉しい首の祭り、踊れ踊れ、踊らぬ者に誰がお嫁に行くものか、昨日浜で見た酋長の娘今日はバナナの木陰で眠る」という歌詞です。これらは大衆文化のレベルで南進論を唱導した物と言えるでしょう。

（４）満州事変と国際連盟脱退

南洋群島は当時の日本にとっては 過剰人口のはけ口となる移住植民地でもありました。これは植民地として領有しても、本国からの移住者が僅かであったスペインやドイツとは大きく異なるところであります。また満州事変以後、国際関係で孤立を深めるようになると、この海域は資源確保のための重要な足場となっていきます。南洋群島自体にはリン鉱石以外に見るべき資源はないのですが、南洋群島すなわち内南洋は東南アジア、時にオーストラリア、ニュージーランドも含むすなわち外南洋への足がかりとなる地域であります。つまりここは日本にとって絶対に手放せない海ということになります。

1931年に満州事変が勃発します。日本の関東軍は1931年9月18日当時の奉天駅近くの柳条湖付近で満鉄（南満州鉄道）が爆破されたという口実の元に、奉天はじめ各地に兵を進めたことにより、中国との間に紛争が生じます。各地に拡大していく日本の武力行使に対して、蒋介石国民政府主席は日本に抗議すると同時に、国際連盟に規約第11条に違反するとして日本の侵略を提訴します。規約第11条とは「連盟は国際平和を擁護するために適当かつ有効な手段を取る」というもので、以後この提訴により何度も理事会が開かれたようであります。当時日本は連盟の常任理事国でありました。

日本はこの地に日本が支持する新たな国、満州国を作ろうとしていました。度重なる議論の末、有名なリットン調査団がこの地に視察に訪れたのは1932年のことで、調査団は日本経由で3月14日上海に到着します。リットンは1876年生まれのエギリス人、国際連盟の強い支持者であったそうです。

この報告書を審議する国際連盟の会議の日本首席代表は松岡洋介です。リットン報告書をめ

ぐって各国代表による激しい議論が繰り返されましたが、斎藤内閣は33年2月20日の会議で、連盟総会で仮に「第15条4項」に基づく勧告案が採決された場合には「連盟脱退の方針を定め、帝国憲法下の手続きを執る」という基本方針を決定してしまいます。この勧告案には①満州の主権は中国に属すること、②満州における現制度（満州国）の維持及び承認は、現行の国際間の義務の基本原則ならびに極東における平和が依拠している日中両国間の友好的了解と両立できないこと、③連盟国は今後も法律上、あるいは事実上現制度（満州国）を承認しないことなどが記載されていました。採決は2月24日の総会で行われ、投票総数44、賛成42、反対1（日本）、棄権1（シヤム）でした。この結果に、首席代表の松岡は「日本の連盟との協力はその努力の限界に来た」として、他の日本代表らとともに退場します。

一方日本国内では満州国を一刻も早く承認すべきという機運が高まっていました。これ（『国際連盟脱退と日本のマスメディア』1995）は、立教の図書館で見つけた刊行物ですが、慶応大学法学部政治学科の玉井清研究室ゼミ学生たちの労作です。すべてコピーなので読みにくいのですが、非常に丹念にマスメディア記事を収集しています。これで見ると、どれも大変勇ましくて、当時の日本の新聞が揃ってどのような論調を展開していたかということがよくわかります。たとえば「リットンなんて東亜のことは何も分かっていない」、「潔く脱退すべし」「松岡代表の快挙」などなど、一方的な意見ばかりで、今更ながら、世論形成の上でマスコミというのは恐ろしいなと思います。とくに朝日、毎日、読売など多くの新聞社が名を連ね、満州国を承認しない国際連盟はけしからんという共同宣言まで出しています。

この中に面白い漫画があります。国際連盟湯というお風呂屋さんで、イタリア、ドイツ（1926年に加盟、同時に常任理事国）、イギリス、日本が風呂に入っていました。日本が1人だけここから出て行くと、残った人々がぶるぶる震えているという構図です。この頃日本政府がもう少し周囲を見渡せる知恵があれば、あの不幸な戦争に突入せずに済んだのではと悔やまれます。

（5）委任統治領の行方

こうして勇ましく、国際連盟から脱退してしまいましたが、では国際連盟を脱退したら、そこから委任されていた南洋群島はどうなるのでしょうか？法的には4つの考え方があるようで紹介されています。

- ① タイトルは主要連合国およびそれと関連する諸国にある。ヴェルサイユ条約119条ではドイツは連合軍に従来までの所有領土の放棄をしている。この見解からいえば少なくとも委任統治BおよびCに関してはこの見解が成り立つ。
- ② タイトルは国際連盟にある。これを示す直接的条文はない。ただこれに関連すると思われるのは、委任統治領は受任国が「on behalf of the League of Nations」という語が唯一の物である。
- ③ タイトルは受任国にある。22条には「could be best administered under the law of the mandatory as integral portions of its territory」とある。
- ④ タイトルは委任統治領の住民にある。このような考え方はA式委任統治領には該当するかもしれない。タイトルという意味がここでは前の2種と違って使われている。前3者の場合にはその地域に自由に何らかの権利を持った国家ないしは主体というような意味であるのに対し、第4の場合にはその地域に対する政治的権威の究極的存在といったようなこ

と関係している (Francis B. Sayre, 1948 : 263~297)。

こうした見解は実はどれもそれほど明確な物ではないのですが、第①案が最も根拠があると思われていたそうです。その根拠となるのが、ドイツは連合国に対して自国の海外領土を放棄すると宣言しました。したがってこれらの地域に関する権利は国際連盟ではなくて、主要連合国であるということになります。

脱退後間もない 1933 年に国際連盟協会が発行した立作太郎 (東京帝国大学教授、国際法・外交史) の論文は次のように述べています。彼は先ず委任した地域の主権はどこに存在するかという問題について、たしかに、受任国は連盟に代わって後見の任務を行なっているのであり、委任者である連盟が主権者の地位に立つとする意見があると記した上で、以下のように論じます。

パリ講和会議の国際連盟委員会に提出された原案では、C 式委任統治に関して「恰も受任国の領土の構成部分たる如く」(as if integral portions of its territory) であった。しかし英米仏伊に日本を加えたそれ以前の 10 人会議では、「受任国の構成部分として」(as integral portions of thereof) であったため、日本の牧野伸顕がこれに異を唱え、if を削除することとなったという経過があった (立作太郎 1933 : 8)。

日本が南洋群島の受任国となることが決まった時には、まだヴェルサイユ条約は調印されていないのであって、最高会議の決定は連盟の成立を待たないで、主たる同盟及び連合国が南洋統治の権力を日本に帰属させることを、ヴェルサイユ条約の効力確定を条件として決定したと考えられる。したがってこれら諸島が連盟の主権の下にあるという根拠は乏しい。また規約中に連盟が委任地域において領土権を有する、ないしは主権を有するという明確な明らかな文章は存在していない。

また受任国は先進国と定められているが、連盟加盟国であるとする規定はない。しかしそうした国が受任国になった場合には、実際上の困難さが予想される。

日本の委任統治地域である南洋群島において、大日本国皇帝陛下が、連盟の代理者として連盟の主権の元に施政を行なっているのではない。国際的合意に基づき大日本帝国領域の一部となして、大日本国皇帝陛下が固有の主権を委任統治地域に拡張して、大日本国の国法の下に統治を行なうのである (同 21)。

以上が立作太郎の国際連盟脱退後も南洋委任統治を続行することは問題ないという論拠であります。こうした考えは日本にとって都合のよいものであり、日本の多くの識者はこれに従っており、今後も日本が委任統治を続ける意義を強調しています。

海軍は当初脱退に慎重な姿勢を取っていました。それはアメリカと開戦になった場合準備不足であると考えていたためです (太田久元 2007 : 41-42)。しかし、脱退が決定した後には以下のような声明を出したそうです。「満州は大陸における日本の生命線である。同時に南洋は海上における日本の生命線である。この生命線の確保の為には日本は死力を尽くすものである。南洋統治は国運を賭しても続行する。若しこれに反対する国があったなら実力を持って対抗するのみである」。「南洋群島は帝国の領土であり、海に生命線であるから現在群島に居住する住民も、これから発展せんとする渡航者もともにその生活、また居住に意を安んずべきであって、将来杞憂を抱く者の為に特に付加しておく」(志村秀吉 1935 : 5)。

一方、ドイツ領植民地の配分は国際連盟の発足に先立つのであるから、連盟からの脱退と受任国の位置は関係ないとする、立作太郎のような論理に批判的であった蠟山政道(1895-1980)

や矢内原忠雄（1893-1961）も、日本が受任国として国際協調の理念に沿って、その義務を果たすことが日本の委任統治続行の実質的根拠となると考えていました（等松春夫、2011、83-84）。

日本が国際連盟脱退を通告してから、それが効力を発生するまでは2年の猶予があり、1935年3月27日に正式脱退となりました。

日本が連盟を脱退した時、ドイツが日本に代わってかつて植民地としていたミクロネシアの島々の受任国になりたいと希望したそうですが、これは実現しませんでした。また国際連盟から正式にこの島々の返還を求めるという要求はなかったようでもあります。

（6）ワシントン軍縮条約の破棄と南洋神社の設立

日本は国際連盟委任統治の受任国として、取り決められた幾つかの条項を脱退後も守り、毎年の報告書も提出していました。しかし日本がこれらの島々を要塞化しているという噂が、アメリカやヨーロッパでしばしば流れました。日本は常にそれを否定して、そのような噂の根拠は港湾の設備であり、それに多額な費用を掛けたためであると弁明しています。アメリカ人でも委任統治の条項に日本が違反しているという兆候はないという報告をしている人もいます（たとえば Clyde は 1935 年日本政府の招待を受けて島々の内部を自由に観察する許可を得たという）。

1922 年のワシントン軍縮会議でも、南洋群島の軍事基地化は禁止されていました。しかし 1934 年日本はワシントン軍縮条約の破棄を通告し、36 年には条約が失効して、それ以後日本はこの地域にも軍事基地化を公然と進めるようになって来ます。とくに飛行場建設が重視され、対米開戦時に存在していた飛行場は陸上で9面、海上で10面あったそうでもあります。40年、41年には駆逐艇や砲台を持つ根拠地隊が4つ編成され、守備兵力は3500名ほどとなりました。

受任国の義務として宗教の自由があります。日本は統治の最初から、キリスト教布教活動に相当の財政的援助を行い、その活動を積極的に評価してきました（青柳まちこ 1977:62-65）。神道の進出は意外なほど遅れています。もちろん人々がそれぞれの地域でお祀りしている村の神社は、それまでも日本人の住む地域に存在していましたが、国家を背景に持つ神社がミクロネシアに進出するのは、連盟脱退後のことでありました。これが官幣大社の社格を有する南洋神社です。南洋庁長官北島健次郎の申請により、紀元2600年、つまり1940年紀元節に、官幣大社としての認可が宮内庁から下りました。この時の南洋庁の談話は以下の通りであります。

…我が群島も茲に遙かに燦然たる光芒を放ち、在住12万の蒼生も茲に初めて其の安堵の地を得た思ひがいたします。

委任統治といはれ外地と称せられて ともすれば如何にも日本本土と全く相異なるかの感ありました群島も 斯て初めて揺ぎなき皇土の一構成部分として確認せられた感が致します 群島在住7万有余の邦人は今日こそ此処を其の墳墓の地とするの決意を固くしたであります 此処に骨を埋めてゐる幾多先人の霊も今日こそ初めて真に其の居を得たと感泣してゐることと信じます（原文片仮名を平仮名に変更）

南洋神社はパラオのコロール島アルミズの丘に創られ、同年11月1日、勅使が御霊代を奉じて参向して鎮座式が行なわれました（青柳真智子 1985:95-96）。

間もなく太平洋戦争開始によって戦火が激しくなり、ご神体をコロールからパラオ本島の山中に移しましたが、神社の建物は建立後僅か数年で艦砲射撃により灰燼に帰してしまったそうです。

連合艦隊の基地となっていたトラック諸島では1944年2月大空襲で多くの艦船が犠牲となり、7月にはサイパン玉砕、8月グアム、テニアンで玉砕、パラオでは1944年10月に南部のアンガウル島で、また11月にはペリリュウー島で玉砕となり壊滅してしまいます。

こうして明治以降、日本が抱いた南進の夢ははかなく費えたのであります。

上田：青柳先生、どうもありがとうございました。

参考文献

青柳まちこ 「旧南洋群島における日本の宗教政策」『南方文化』第4輯：59～78,1977

青柳真智子 『モデクゲイ—ミクロネシア・パラオの新宗教』 新泉社 1985

太田久元 「国際聯盟脱退後における海軍の対外戦略構想—一九三三年を中心として」『史苑』67-2, 39～60, 2007

外務省条約局法規課編 『委任統治領南洋群島』前・後編（外地法制誌第5部）1962～63

慶応義塾大学法学部政治学科玉井清研究会 『国際聯盟と日本のマスメディア』（近代日本政治資料集③）1995

志村秀吉 『南洋群島：熱帯の日本』 志村秀吉 1935

世田谷美術館 『土方久功展—南太平洋の光と夢』 1991

高山純 『南海の大探検家 鈴木経勲：その虚像と実像』 三一書房 1995

立作太郎 『南洋委任統治問題』 国際聯盟協会 1933

図録 『美術家たちの南洋群島』

町田市国際版画美術館、高知県立美術館、沖縄県立美術館・博物館 2008

等松春夫 『日本帝国と委任統治：南洋群島をめぐる国際政治 1914-1947』 名古屋大学出版会 2011

矢内原忠雄 『南洋群島の研究』 岩波書店 1935

矢野暢 『「南進」の系譜』 千倉書房 2009

Clyde, Paul H. *Japan's Pacific Mandate*, Macmillan Company, New York, 1935

Sayre, Francis B. Legal Problems Arising from the United Nations Trusteeship System, *The American Journal of International Law* 42-2 1948

注 文中、酋長という語が用いられておりますがこれは当時の用語をそのまま使用しております。

梅原：私の報告は、日本の戦国時代後半、特に織田信長のころの話であることを念頭にお聞きいただければと思います。16世紀に島嶼部東南アジアにやってきたスペインが、数ある島々の中でなぜフィリピン群島を占領し植民地化したのかという点の追究を課題としました。これは一つには、16世紀半ばのスペイン到来時に現在フィリピンと呼ばれる島々はどんな地域から構成されていたのかという、地域区分論と大きく関係します。私はこれまで農村実態調査を中心に据えてフィリピン研究を続けてきましたが、これをフィリピン全体にどう位置付ければいいのかを考える過程で、地域区分に興味を持つようになりました。フィリピンの地域区分については、政府が広域行政効率化の立場から広域行政地区区分をしています。2010年現在全国を17区分しております。1950年には8区分でした。アメリカが植民地支配を開始した当初全国を6区分しています。あるアメリカ人地理学者は1960年代に5区分23小区分を発表しています。スペインは17世紀にカトリック布教のために司教管区を4管区に分けています。そこでもともとどうだったのか、スペイン到来時の群島にはどのような地域が分布あるいは点在していたのかという点に興味を持つようになりました。

もう一つは、フィリピン人の対スペイン人感情が悪いとは決していえないのはなぜかという疑問からです。私が1960年代初めにフィリピン大学に留学したころ、フィリピン人学生は皆キリスト教徒（クリスチャン）でかつ英語が堪能で、それを大変誇りにしていました。キリスト教はフィリピン人にとって現在でも自負、自信の源泉です。なぜならキリスト教イコール文明と考えるからです。キリスト教化したことにより文明化が大いに進んだ、そのキリスト教をフィリピンにもたらしたのは他でもないスペインでした。フィリピン人の対スペイン人感情が決して厳しくないのは、そのためではないかと思われまます。

スペイン人植民地行政官は、植民統治の初期に、フィリピンの民衆を前にしてよく「われわれは諸君を魑魅魍魎の世界から解放した」といいました。しかし、16世紀前半にラテンアメリカであるように荒々しい占領、植民地化を進めたスペインが、20～30年遅れてやってきたフィリピンでそれとは逆に穏やかで優しい植民地化を進めたとは考えられません。これまでのフィリピン史研究でも、スペインの占領と初期の植民地化過程について相対的に議論が少なかつたように思われます。私はこの点を自分自身で少し探してみたいと考えまして、次のような問題設定をしました。①スペインが海域東南アジアの島々の占領を思い立ったとき、それがなぜフィリピン群島だったのか。ボルネオ島でもスラウエシ島でも、またサンギへ諸島でも良かったではないか。②どのように占領したのか。占領の仕方、過程はどうだったのか。③住民はそれにどう対応したのか、この3つです。

その場合の史資料ですが、スペインに出掛けてオリジナルの史資料に当たって歴史研究を進めることができるような時間的余裕は、私にはもはや残っておりません。ただ幸いなことに、スペイン政府文書、法令、国王書簡、植民地官僚の記録など公文書の英語訳が、Blair and Robertson eds., *The Philippine Islands; 1493-1898*, vols. 55（以下『フィリピン諸島誌』と呼ぶ）が手元にありますので、これをベースとして既存の研究成果を利用すれば、私でもこの課題に対してある程度まで接近可能ではなかろうかと考えています。

フィリピン側からの研究が少ないところで、植民地支配をした側の公的文書中心に研究を進めると、スペイン側＝占領した側の論理に圧倒されて占領された側、つまりフィリピン群島住民の側の論理、主張が見落とされ、はなはだ不公平な認識に到達する危険はないか、という疑問が出てくるかと思われます。この点は非常に重要で、十分注意して史料を読んでいくことが必要です。唯一の救いは、兵士達の占領行動に対するキリスト教聖職者からの批判の存在です。それが国王宛書簡となって本国に送られましたが、『諸島誌』にはそれら手紙類も編集され所収されています。ですから、それらを丹念に読むことによって、ある程度、別の角度からの見解も見えてくるのではないかと考えています。

本日は、皆さんに私の報告を聞いていただき、いろいろご意見、コメントをいただける貴重な機会と受け止めて鋭意努力を重ねてきましたが、研究の進展は牛歩の如くで、今日報告できるのは先程申し上げた3つの課題のうち①のフィリピン群島占領の理由と②の占領の仕方、過程までです。③の住民の対応は、別の機会にでも報告させていただく他ありません。

I 西方諸島をめぐる航路開拓（スペインはなぜフィリピンに来たか？）

1. 西方諸島と香料群島

この時代のスペインを語る場合に忘れてならないのは、イベリア半島の国土回復戦争（reconquista）です。ギリシャ時代に半島東部のエブロ川流域にイベリア人が住み着いていたことからそう呼ばれるようになったといわれていますが、紀元後711年に西ゴート系のキリスト教徒の住む半島部に、アフリカ大陸北西部からムーア系とベルベル系のイスラーム教徒がジブラルタル海峡を超えて侵入、数年のうちに地中海沿岸部からメセタと呼ばれる中央台地まで占拠しました。北部カンタブリカ山脈まで追いやられたキリスト教徒は、以後15世紀末（1492年）までの8世紀間にわたり国土回復戦争を戦うことになります。この戦争がイベリア半島住民の歴史を深く特徴付けるものとなりました。住民の戦闘能力の向上、武器の発達、強大な王権の形成、他国に先駆けての国民国家形成、征服地の経営ノウハウ、などがそれです。

半島最西端のポルトガルは、13世紀半ばに国土回復戦争を完了、14世紀後半には国民国家を形成、東隣の強国カスティリヤ王国の圧力に対抗するために早い時期から海外への膨張政策を採用、大西洋諸島へ進出して、漁業はもとより、入植や商業活動を開始しました。15世紀に入るとモロッコの商業都市セウタを攻略、1460年ころまでにはアフリカ西海岸沖のマデイラ、カナリア、カーボベルデ諸島に進出、88年にはアフリカ南端の喜望峰に到達、98年には遂に喜望峰回りインド航路を発見します。

1469年のカスティリヤ王女イサベルとアラゴン皇太子フェルナンドの結婚、やがてそれぞれが王位を継承してイサベル女王、フェルナンド2世となり、ここに両王権が漸次融合・統合されて強大なイスパニア（＝スペイン）王国が誕生します。そうして1492年1月にはグラナダ王国を倒して長年の国土回復戦争に終止符を打ちました。同じ年の後半にはカスティリヤ王室が支援したコロンブスの新大陸発見のニュースが飛び込みます。国土回復戦争を戦ってきたコンキスタドーレスが新に開けた活動の場を求めて新大陸に向かい、かなり荒っぽい手口で新大陸の原住民社会を破壊し、入植と植民地化を進めます。

大航海時代のスペインには西方諸島（Las islas del poniente）という言葉がありました。これは一体どこのことを指す地域概念でしょうか。現在の地域呼称でいうと島嶼部東南アジアとその周辺地域で、日本、中国からカンボディア、タイなどが含まれます。それなら西方ではな

く東方諸島ないし諸国ではないか、とお考えになられても不思議ではありません。英語のオリエンツという言葉は、14世紀末ないし15世紀初めころから用いられるようになったといわれますから、東方諸国、東方諸島という概念は既にあったはずで、事実、ポルトガルは同じ時期にこれら地域を東方諸国と呼んでいます。

ではなぜこれらの島々がスペインにとって西方諸島なのでしょう。これには二つのことが関係しているように思われます。一つは、島嶼部東南アジア、特にモルッカ諸島、フィリピン群島の地理的位置がヨーロッパから見た場合地球のほぼ対蹠地に近いことです。つまり、東回りで行くと最東端、西回りでは最西端に位置するからです。他は、当時のスペイン人の意識に深く関わると考えられます。15世紀末から西回りで新大陸に進出し、16世紀半ばにはフィリピン群島を植民地に加えて一大帝国を築いたスペイン国王は、「余の領土において太陽は没せず」と豪語しました。こうした認識のスペインにおいて、マドリッドよりも8時間前にマニラで夜明けを迎えるとは考えにくかったのです。そうではなくて、マドリッドから7時間遅れてヌエバエスパンヤ（現メキシコ）で夜明けを迎え、さらに9時間遅れて、つまりマドリッドから16時間遅れてマニラで夜が明ける、とスペイン人は考えました。事実、スペインが16世紀後半に持ち込んだ暦ではフィリピンの日付が1日遅れでした。これが修正されるのは実に19世紀半ば（1844年）、マニラの開港から10年後のことでした。このように、島嶼部東南アジアの地理的位置とスペイン人の意識から西方諸島という独特の地域呼称がスペイン人によって使われていたと考えられます。

2. 大航海時代の陸地、島々の「帰属」問題

周知のように、1492年にはスペイン国王の支援を得てインドを目指し大西洋を西進したコロンブス隊が新大陸を「発見」します。これを機にポルトガルとスペインが、新に到達した陸地や島々の帰属あるいは領有をめぐる争い、衝突が起こるであろう事が明白になってきました。そうした事態の回避をねらって急遽公布されたのが教皇勅書であります。当時のヨーロッパ・キリスト教世界には、「教皇権力の完全性 (fulness of our apostolic power)」とか「全世界を支配する者 (ドミヌス・トティウス・オルビス)」といった教皇至上主義の言説があって、これまで未知であった陸地や島々を教皇は勅書によりスペインやポルトガル国王に下賜または贈与できる、という認識がありました。教皇は、勅書でアゾレス諸島もしくはカーボベルデ諸島の西100レグア（約560km）の地点に南北の境界線（子午線、以下これを第1子午線と呼ぶ）を引き、それを境に東側をポルトガル国王、西側をスペイン国王の領有と認めよう、としました。

勅書は3回公布されますが、最後の勅書の表現にポルトガルの権利を否定したように読み取れるところがありました。そこで翌（1494）年、ポルトガルがスペインと直接交渉して締結したのがトルデシリャス条約です。そこでは、第1子午線をアゾレスもしくはカーボベルデ諸島からではなく、明確にカーボベルデ諸島の西とし、そこからの距離を100レグアにかえて370レグア（約2,000km）に伸ばしました。当時の世界地図は図1に示したようなものでした。まだ新大陸の認識はなく、ユーラシア大陸の東の果てには東アジア大半島があり、それと西のインドシナ半島・マレー半島の間にはシヌス・マグヌス（大湾）があり、ジパングやモルッカ諸島はこの大湾の中にあると考えられていました。そうして、プトレマイオスの考えにもとづいてアフリカ北西岸沖のカナリア諸島から東アジア大半島西側のカティガラ（比定不詳）までが180

度とされました。第1子午線はカーボベルデ諸島の西2,000kmの地点（カナリア諸島から30度西方と後にいわれる）に設けられましたが、正確には誰にもその位置が分かりませんでした。当時は未だ経度の測定が困難だったからです。1500年にはポルトガルが南米大陸のブラジルに到着、そこはまだ第1子午線の東側と判断されて、ポルトガルの領有になりました。

トルデシヤス条約から20年と経たないうちに、ポルトガルは東回りでモルッカ諸島に、やや遅れてスペインも西回りでここに辿り着きます。そうしてスペインは、モルッカ諸島を含む西方諸島はトルデシヤス条約でいう第1子午線の西側のスペイン国王の領有範囲と主張しますし、ポルトガルは先占の事実と共にモルッカ諸島まではポルトガル国王の領有範囲と主張して譲りません。ここで明確にしなければならないのが、第1子午線の裏側の第2子午線の位置です。この第2子午線がどこを通過しているかが明確になれば問題は一気に氷解します。両国はこの問題を何とか平和的に解決しようとして1524年にスペインのビトリア、続いて両国国境に近いバダホスで専門家会議を開きますが、両者の主張は平行線を辿るばかりでした。スペインの主張の根拠は、15世紀ころから再評価されていたプトレマイオスの考えにもとづくもので、第1子午線がカナリア諸島から30度西ならカティガラの西30度はガンジス川河口であるという認識でした。したがって、双方が納得のいく結論を得られるわけがありません。そこで1529年に再びスペインのサラゴサで会議を開きますが、その会議の結論がサラゴサ条約です。条約のポイントは、①スペイン国王はモルッカ諸島と周辺の島々、および海域の領有に関するあらゆる権利をポルトガル国王に対して買い戻し権付きで売却する（抵当設定する）こと、②以後スペイン国王は、同上地域での活動を自制すること、③ポルトガル国王は、これに対してスペイン国王に35万ドゥカットを支払わなければならない、というものでした。なお、サラゴサ条約では第2子午線はモルッカ諸島から東方297.5レグア（約1,780km）の地点を通過するというので双方が合意したことになっています。ただし、プトレマイオス説に依拠するスペインとしては、合意はしたもののそれを全く信じてはいなかったようです。

3. モルッカ諸島への西回り航路開拓

こうしてスペインが、一旦、モルッカ諸島から手を引くことで問題の決着をみました。1530年代半ばまでにはチドール島のスペイン部隊は撤退し、条約締結後10年余りの間スペインのモルッカ遠征隊派遣は一切なくなりました。しかし、最初に見た夢はなかなか忘れられないようで、イベリア半島からモルッカ諸島への西回り航路開拓がその後も続けられます。

ところでモルッカ諸島といえば、ご存じのように、香辛料のクローブ、ナツメグ、メースの原産地です。17世紀まではここが地上唯一の産地でした。というのも、クローブとナツメグの樹は、世界広しといえどもこのモルッカ諸島にしか自生していなかったからです。18世紀になってフランスがクローブの樹の苗をモーリシャス諸島に持ち出して産地独占が破られ、現在ではアフリカ大陸東岸、タンザニアのザンジバル島、ベンバ島が主要産地となっています。クローブ、ナツメグ、メースは、中国、インド、ヨーロッパでは古くから医薬品、調味料として珍重されてきましたが、それらの消費地では産地がどこかよく分かっていませんでした。マレー人がモルッカからスマトラ、ジャワ島の市場に運び出し、そこに中国人、インド人、アラブ人商人がやって来て買い付け、北の中国、西のインド、さらに西方のアラビア、ヨーロッパに運んでいたからです。ヨーロッパでは15世紀頃から香辛料としての利用が進んで需要が一気に高まりますが、産地から遠く離れているため、その入手にはマレー人、インド人、アラブ人、

さらにベネチア人など多数の商人の手を経なければならず、価格が非常に高騰しました。モルッカでの価格の何十倍、否何百倍にもなりました。そこで直接産地にアクセスしようとの衝動から、まずポルトガルがアフリカ大陸南端経由でインド・アジアへの航路発見に動き、少し遅れてスペインが西回りでアジアへの到達を試みるようになります。大航海時代の幕開けです。

ポルトガルはインド航路を発見、カリカットに到達後、1510年にはゴアを占領、翌(1511)年にはアルブケルケ隊がマレー半島のマラッカを占領、次の年にはアブレウ隊がモルッカ諸島を目指します。しかし同隊はモルッカには到達できず、バンダ諸島から引き返しますが、途中に遭難した遠征隊員の一部がその年にテルナテ島にたどり着きテルナテ王の軍事顧問となりました。ポルトガルが公式にモルッカ諸島を訪れるのは1514年で、ここから交易関係が成立します。他方、西回りでアジアを目指したスペインは、1521年3月にフィリピン群島、同年11月にモルッカ諸島のチドール島に到着します。以後両国は、モルッカ諸島の領有をめぐる半世紀以上にわたり激しい争いを繰り広げることになります。

スペインが同国の港から派遣した西回りのモルッカ諸島遠征隊は、最初がセビリヤから発ったマゼラン隊(1519～1522)、次がコルーニャ港からロアイサ隊(1525～1526)、さらにサンルカール・バラメーダ港を出発したカボット隊(1526～1527)の3回です(資料1)。うち最後のカボット隊はラプラタ川河口まででしたので、モルッカに到達したのは最初の2つの遠征隊だけです。マゼラン隊は大西洋から太平洋に抜ける海峡の存在を知らないまま出発したので、その発見と通過に大変苦労しました。5隻の船隊は、途中反乱を起してスペインに引き返すもの、暴風に煽られて難破するものがあり、1520年11月(出発の1年3ヶ月後)にマゼラン海峡を無事通過して太平洋に出たのは3隻のみでした。その後4ヶ月に及ぶ長くて不安な太平洋横断航海の末の1521年3月、マゼラン隊の3隻はサマル島南端(北緯11度)に到着しました(図2の①)。航海中に大勢の乗組員を失った上に、セブ島での不祥事(セブ王によるスペイン人招待客の闇討ち)もあって、出発時に300人近かった乗組員がセブ島出発時には120人程度にまで減少していました。3隻のうち老朽化の進んだ1隻をボホール島西岸沖で焼却処分して、残る2隻がボルネオ経由で同年11月にモルッカのチドール島に到達しました。しかしその北のテルナテ島には既にポルトガル部隊がいて、スペイン隊の即時退去を迫りました。そこで大洋航行不能となったトリニダッド号と数十人の兵士をチドール島に残して、ビクトリア号だけが1521年12月に西回りでスペイン帰還の途につきます。幾多の苦難を乗り越えて翌年9月にセビリヤ港に到着、世界周航の偉業達成となりました。しかし生きて帰ったのは18人のみでした。

ビクトリア号のスペイン帰還は、スペイン王室の香料貿易への期待を大きく押し上げました。その結果王室は、1525年7月、カスティリャ貴族出身でローデス騎士団隊長のガルシア・ホフレ・デ・ロアイサを総司令官とする、7隻、乗組員450人からなる大遠征隊を、スペイン北西部ガリシア地方のコルーニャ港からモルッカ諸島に向けて送り出します。しかし、ロアイサ隊は航行中に幾多の不運にも見舞われて初期の期待に応えることが出来ませんでした。太平洋上で総司令官を病死で失った上に、7隻中反乱船が2隻、難破船1隻、離散船3隻も出て、旗艦のみが、1526年11月、ミンダナオ島東岸(8度45分のリアンガ湾)を経由してモルッカに到達、その時乗組員数は105人に減っていました(図2の②)。

マゼランがモルッカ諸島遠征に出て途中フィリピン群島に立ち寄っている頃、エルナン・コルテスは中米メキシコのアステカ王国を征服、スペインの新植民地、ヌエバエスパニャが誕生

します。以後中南米地域が次々と征服されてスペイン植民地となります。こうなってくると、スペインの港を出帆して大西洋横断、新大陸南端まで下がってマゼラン海峡を經由、太平洋を横断してモルッカ諸島に到達するのではなく、ヌエバエスパニャ西岸から直接太平洋に出てモルッカに向う太平洋横断航路が浮上しました。そうすればモルッカまでの航行日数の大幅短縮のみならず、航行中に遭遇するであろう数々の危険も大幅に縮減できます。

4. 新大陸西岸から西方諸島への太平洋横断航路

スペイン王室の要請を受けた総督コルテスは、1527年10月末、3隻の船と105人の乗組員からなるサアベドラ遠征隊を、ヌエバエスパニャ西岸のシワタネホ港からモルッカ諸島に向けて送り出しました。新大陸から西方諸島に向かう最初の太平洋横断の試みです。途中、暴風に襲われて2隻が離散、旗艦のみが翌年(1528年)2月にミンダナオ島南東部のシアルガオ島(10度)、3月末に目的地のチドール島に到着しました(図2の③)。出発から到着までの所要日数は丁度5ヶ月、14~16ヶ月かかったヨーロッパからの航路に比べて格段の時間短縮です。

モルッカ諸島にやって来る目的は、そこでクローブ、ナツメグ、メースを大量に買い付けてヨーロッパに持ち帰ること、同時にそれを恒常的に行える貿易体制の確立です。それには貿易拠点の確保と帰還航路の確立が不可欠となります。風向きに頼る帆船時代には、往路と帰路が場合によっては大きく異なるのが普通です。太平洋を東から西へ移動するには北緯10度付近の偏東風、つまり貿易風帯に乗るしかありません。しかし、西から東に移動するには北緯30~40度の偏西風帯に頼るのが一番確かです。赤道直下に近いモルッカ諸島から偏西風帯に入るためには、赤道無風帯(doldorums)、貿易風帯を通過しなければならず、これが結構難題です。サアベドラはこの帰還ルートを開拓するべく1528年6月と29年5月に2度挑戦しますが、いずれもニューギニア島北岸を東進して途中から北上、偏西風帯に入る手前で失敗しました。

このころ本国ではサラゴサ条約が結ばれ、スペインがモルッカ諸島から手を引くこととなります。サアベドラ隊以後モルッカ遠征隊派遣はしばらく自粛されますが、1540年代になると再び西方諸島遠征隊派遣計画がヌエバエスパニャ副王(アントニオ・デ・メンドサ)とグアテマラ総督(ペドロ・デ・アルバラード)の間で検討されます。この計画が実行に移されたのが、1542年11月にヌエバエスパニャ西岸のナビダッド港から出帆したビリャロボス遠征隊です。目的は西方諸島のいずこかに根拠地を建設すること、西方諸島からヌエバエスパニャへの帰還航路を確立することの二つでした。ここで始めて根拠地としてフィリピン群島が注目されるようになるのです。ビリャロボス隊が到着したのはミンダナオ島東岸のカテール湾(7度40分)でした(図2の④)。

ビリャロボスは、モルッカ諸島に一番近いミンダナオ島南端の小島サランガニ島に本拠地建設を進めましたが、周辺の島々での食料調達がままならず、食料を北方のタンダヤ・アブヨ(サマール・レイテ)島に大きく依存するようになります。1543年8月にサランガニ島からヌエバエスパニャへの帰還船派遣に挑戦しますが、船は途中レイテ島に立ち寄り、そこで航海に必要な食料を積み込まなければなりませんでした。その時ビリャロボス隊の食料調達船がレイテ島まで帰還船に同行しますが、ビリャロボスがこの時、食料豊富で幸運の島、タンダヤ・アブヨ島を当時のスペイン皇太子フェリペの名に因んでLas islas de Filipinasと命名しました。これがフィリピンという地名の語源です。やがてレイテ島に本拠地を移すため11月にサランガニ島の本拠地を放棄します。しかし、強い北東風に行く手を阻まれて北上できず、隊員の食糧

が逼迫する中、万止むを得ず禁断のモルッカに向かい、チドール島の王に支援を要請しました。そこでも帰還を試みますが失敗します。こうして本拠地建設と帰還ルート確立に失敗したビリャロボスは、ついにテルナテ島のポルトガル部隊に降伏、ポルトガル船でインドに向かう途中アンボン島で客死しました。

以上からも明らかなように、スペインは最初からフィリピン占領を目指していたわけではありません。目標はあくまでモルッカ諸島でしたが、それがポルトガルとの関係で思い通りにならなかった。ためにスペイン王室の狙いが、1542年のビリャロボス隊派遣のころから、西方諸島全般との交易、そのための交易拠点確保と航路確立に移って行ったと考えられます。その場合、貿易風に乗って太平洋を東から西に横断すると必ず到達する北緯10度前後のフィリピン群島東岸が注目されるようになり、ここに根拠地建設が想定されるようになってきました。

II レガスピ隊のフィリピン群島占領

(スペインはどのようにしてフィリピンを占領したか)

1. 遠征隊のフィリピン群島到着

ビリャロボス隊のヌエバエスパニャ帰還失敗と同隊のポルトガル隊への降伏によりスペインのモルッカへの夢は半ば断たれたかの感がありました。事実、以後20年近く西方諸島への遠征隊派遣はありませんでした。しかし、王室上層部には派遣計画が密かに継続していた、といわれています。カルロス国王は1556年に執権を息子のフェリペ皇太子に委譲して退位しますが、新国王フェリペ2世は即位後間もない1559年にヌエバエスパニャ副王に対して西方諸島遠征計画の早期実施を明確に命じています。その結果編成されたのが、ギブスコア出身で当時メキシコ市会事務長をしていたミゲル・ロペス・レガスピを総司令官とする西方諸島遠征隊です。このとき国王からの秘密命令として伝えられたのがフェリピナスに永久居留地を建設せよとの遠征目的でした。つまりこれはフェリピナス遠征隊でした。

乗組員480人が4隻に分乗したレガスピ隊は、1564年11月21日にヌエバエスパニャ西岸のナビダッド港をフェリピナス向けに出帆、途中1隻を失いますが、残りの3隻と乗組員約300人が翌年2月初旬にサマル島東岸(12度10分)に到着しました(図2の⑤)。その後スリガオ水道からレイテ湾に入り、レイテ島、ボホール島などを經由して4月下旬にセブ島に上陸します。

レガスピがセブ島に本拠地建設を決心するのはボホール島においてでした。島の南部、ルボック川河口のロアイ湾にしばらく停泊してミンダナオ島北岸、ネグロス島、セブ島などを探査した上でセブ港が、その地理的位置の良好さ、港の設備および集落規模の適切さ、マゼラン隊との因縁などから本拠地に最適と判断したからです。

スペイン到来時のフィリピン群島には、7つの主要言語集団の占拠する地域が分布(点在)していました(図2の破線)。ルソン島北部にはパンガシナン語、イロコ語、カガヤン語を話す人々の集住する地域があり、中央部にはタガログ語と一部にカパンパガン語を話すマニラ湾・バタングス・ミンドロ地域、南東部にビコラノ語を話すビコールの3地域がありました。ミンダナオ島には北東部のブトゥアン人、カラガン人の住むブトゥアン・カラガ地域と南西部のマギンダナオ語を話すマギンダナオ人の占拠するマギンダナオの2地域があり、スルー諸島はそれ自体が1つのスルー地域を形成していました。ルソン島とミンダナオ島の間にあるのがビサヤ地域で、セブ島を中心としてビサヤ語を話すビサヤ人の集住地域です。住民生活は基

本的にそれぞれの地域内部で完結し、地域を越えての相互交流はごく稀で、それぞれが他国、外国に等しかったと推察されます。地域ごとに言語が異なったからです。

各地域にはそれぞれ中心集落があって、そのいくつかは中国の記録に 10 世紀ころから朝貢国家として名前が記されています。こうした地域と地域をつないだのは交易商人で、タガログ人、ビコール人、中国人、ブルネイ人、シャム人などした。レガスピ隊が上陸して居留地建設をしようとしたのは、このような群島状況下のビサヤ地域のセブ島だったのです。

2. 上陸・居留地建設・和平交渉

まず、セブ島上陸の過程はどうだったのでしょうか。レガスピ隊が、1565 年 4 月 27 日、セブ港に入港すると間もなく、1 人の現地住民がカヌーで旗艦に近づき、「セブ王は今町にいるのでやがて会いに来るであろう」といって立ち去る。しばらくすると王の名代と称する別の者がマレー語通訳を連れてやって来て、「王は司令官に会う用意が出来たので、その日のうちに他の首長同伴の上面会に来る」と告げました。レガスピ総司令官は、1 日中王がやってくるのを待ちますが、だれも現れません。ふと港の集落を眺めると、住民は家財道具をまとめて家から運び出そうとしているし、男たちは武装している様子です。港の護岸の方に目を向けると、集まってきた援軍を含めて約 2000 人の兵士がすでに戦闘準備に入っていました。これを見たレガスピ総司令官は、住民と一戦交えるのはもはや避けられないと判断、兵士に戦闘態勢を取らせて港の護岸に近づけると、住民側の兵士が弓矢や投槍で襲ってきました。スペイン側が大砲の轟音と共に火縄銃を発射したところ、住民兵士は驚愕して敗走し、住民も集落に火を放って一斉に山地に向った、といわれます。2000 人もの兵士がそう簡単に引き下がったとは思われませんが、スペイン側の記録ではそうなっています。

レガスピ隊は、こうして住民が逃げて空っぽになった港集落に入り、グアダルーペ川河口左岸の、防衛上最適と思われる場所に、要塞であり部隊宿営地でもある居留地用敷地を確保しました。そして、上陸から 10 日余り後の 5 月 8 日に早々とセブ島占領条例 (Act of taking possession of Cebu) なるものを公布しました。条例の中身は、①今レガスピ隊がいるセブの町は海のそばにあって、住民が放棄した町であること、②総司令官はスペイン国王の名の下にここを占領、その範囲をセブ島とその属島としたこと、③占領を証明するために総司令官は、ここでミサを挙げ、これから建設される教会の地点を指し示し、ある地点から別の地点まで歩いて占領行動をとったがどこからも異議申し立ては出なかったこと、の 3 点です。書かれた事実を重視するヨーロッパ独特の文書主義の反映と思われる。また、「住民が放棄した町・・・」という表現からも、スペインがいかに占領の正当化に懸命であったかが分かります。

占領条例公布後直ちに居留地建設を始めました。レガスピ隊が選んだ居留地予定地は、東をセブ港、南西をグアダルーペ河口に面した三角形の土地でした。まず陸地が続く北西部を頑丈な矢来で囲み、河川に面した部分に堡壘を築き、内部に教会、修道会の建物、交易商品などを保管する倉庫、多目的大型家屋、兵舎、住宅の建設、飲料水確保のための井戸掘削が 3 箇所で行われました。

セブ島上陸後続けてきた帰還用サンペドロ号の修理・整備も 1 ヶ月程度で終わり、6 月 1 日には通算 6 度目となるヌエバエスパニャ向け帰還の試みが実施されました。セブ港を出たサンペドロ号は、一気に北緯 30 度過ぎまで北上して偏西風に乗り、9 月下旬にロサンゼルス沖に到達、10 月上旬にアカプルコに帰還しました。待望の帰還成功であり、西から東に向けた太平洋

横断航路の確立であります。これによりその後 250 年間続いたマニラとアカプルコを結ぶ中継貿易、通称ガレオン船貿易の開始となりました。

総督が次に急がなければならなかったのが、住民との和平交渉です。和平交渉といっても、それはスペイン側が住民側に対して一方的に「平和と友好 (la paz y la amistad)」提案を行いそれに同意を求めるものでした。住民が「イエス」といえば、「では、お前らは今日からスペイン国王の臣民だ。これからは我々がお前らを守ってやる」といい、間髪を入れずに、だから「国王に貢納トリプトを支払え」と迫ります。「ノー」と答えたものは攻撃されるだけです。こうして住民に無理やり「イエス」といわせ、スペイン人兵士が金製品、宝石、各種装身具などを貢納として取り上げて、和平成立となります。

なぜこうも荒っぽいことが出来たのでしょうか？それは新大陸でのインディオ征服を正当化するための降伏勧告状 (requerimiento) と呼ばれる文書に由来すると考えられます。1513 年に編纂された同勧告状は、インディオの前で読み上げられました。内容は、聖書にもとづいて世界の創造を説き、世界の支配者であるローマ教皇が 1493 年の教皇勅書でインディアスをスペイン国王に授与、譲渡、委託されたと述べ、したがってインディアスの支配者としてのスペイン国王に服従するよう説得します。もしインディオが服従を拒否した場合、スペイン人はインディオの領土に侵入し彼らを抑え殺害し、土地・財産を奪い、できる限りの害を加えることができる、とあります。

言葉は違いますが、スペインのいう“平和と友好”提案＝和平交渉がこの降伏勧告状の論理と全く同じであることは明白です。群島住民はこうしてスペイン国王の家臣となり、国王の命を受けてこの地にいるレガスピ総督（後に植民地政府）の活動に協力し、毎年貢納を支払い続けることを義務付けられたのです。

上陸から 1 ヶ月経っても一向に退去する様子のないレガスピ隊に対し、セブ王の側も対応を変えざるを得なかったものと思われます。6 月後半に入ったある日セブ王トゥパスは、総督の呼びかけに応じて、数人の首長と 50 人ほどの従者を引き連れ居留地に現れました。その時王が何を考えていたか知る由もありませんが、そこで総督は直ちに王たちと和平交渉に入り、平和と友好提案に同意を取り付け和平成立の運びとなりました。交渉の最終段階で居留地を取り上げ、スペインが港集落の住民から無理やり奪い取ったのではなく、住民側がそれを友好の証として進んで提供してくれたこととしてしまいました。しかし、こうして無理やり「イエス」と言わせただけの和平ですから、和平がいつどこで崩れても不思議ではない、不安定なものでした。しかも王とか首長の権威の及ぶ範囲に限られているため、セブ島内でも南部では和平は未成立でしたし、いわんや別の島々ではもちろん未成立のままでした。したがってスペインにとっては、これから先、行き先々で武力を背景に和平提案をする必要がありました。

3. 食糧調達とポルトガルの脅威

群島に到着して以降も一向に解決しないのが食糧問題です。屈強な成人男子約 300 人からなるレガスピ隊の食料需要は、住民集落 3 ～4 ヶ村分（当時 1 ヶ村辺り人口は 150～300 人）にも相当する規模と推定されます。群島住民とレガスピ隊の物理的力の差（弓矢・槍・短剣 vs. 大砲・火縄銃）は歴然でしたが、住民には食糧供給の拒否・妨害といった最強の「武器」が残っていました。首長がスペインとの和平に同意した集落ではともかく、それ以外の集落ではレガスピ隊の食料調達を拒否したのです。そこで遠征隊の食糧不足は深刻を極めました。レガス

ピ総司令官はしばしば兵士に武器携帯による食料の自己調達を許可したといわれます。お腹を空かして武器を携行するスペイン兵が、住民に何をしたか想像に難くありません。しかし、居留地建設に入り、和平交渉を開始した今、そのような食料調達は居留地周辺では許されません。

食糧不足が深刻化する中で実施されたのが、近隣諸島への食料調達遠征であります。隊長以下 50~70 人程度の兵士に和平成立集落の住民協力者を同行させ、かなり露骨な食料調達をやりました。行く先々の集落でまず住民に和平を提案して食料供給を要請、拒否されれば襲撃となります。こうして遠征隊派遣はビサヤ諸島全域からミンダナオ島北岸各地に及び、その制圧を進めました。

レガスピ隊がセブ島を拠点に食料調達遠征を繰り返しているころ、それに気付いたポルトガルは同隊に対して、フィリピン群島での活動を直ちに停止してそこから立ち去るように強く働きかけます。理由は、フィリピン群島もモルッカ諸島と共にカルロス国王がサラゴサ条約でポルトガル国王に対して抵当権設定した地域に含まれるのでスペインがここに入ってくる権利はない、というものです。ところが、スペイン側は今更「はい、そうでした」といって撤退するわけには行かず、そのまま居座ります。たまりかねたポルトガルは、1568 年 9 月にセブ港海上封鎖という実力手段に出ました。スペイン側は、港を封鎖されると食料が入ってこなくなり、窮地に立たされました。実力でポルトガルに抵抗したり封鎖を解除したりするだけの軍事力を持っていなかったからです。しかし、スペインにとっては全く幸運にも、海上封鎖していたポルトガル艦隊の船上で伝染病（腸チフス？）が発生、翌年 1 月、封鎖していた艦隊が突如撤退を始め封鎖が解除されたからです。

スペイン側はこの一件に懲りて、1569 年 7 月、ポルトガルの再攻撃を回避するためパナイ島パナイ川の河口、現カピス市近くに本拠地を移しました。移動先がなぜパナイ島かという点ですが、ここは以前から食料が豊富といわれスペインが早くから食料調達で大きく依存してきた地域であったこと、河口が二股に分かれていて海上封鎖が難しいことでした。しかし、大河川の河口ということは大湿地帯であって健康的ではありませんし、加えて丁度そのころパナイ島一帯でのイナゴ大発生により食料供給力が大幅に下がっていました。ためにレガスピ隊の食料事情がまたまた深刻化し、隊員の多くがネズミを捕って食べるという状態となりました。隊員の健康状態は日に日に悪化して、再度本拠地移動を考えなければならないという状態に陥りました。丁度そのころ、ボルネオからスルー諸島を経て、ビサヤ諸島西部、ミンドロ島西側のイリン島、マンブラオ町からルバン島を経てマニラに向う、ブルネイ・マニラ貿易ルートのあることが分かりました（**図 2**の太矢印）。この交易ルート沿いで海賊行為がよく起こるので助けてほしい、という住民からの要請を受けて、レガスピ総督は遠征隊をミンドロ島に派遣、モロ住民の抵抗が激しかったマンブラオとルバン島を攻撃して、住民の平定に成功しました。

4. マニラ進駐と各地制圧

この遠征で初めて、マニラが本拠地移動先としてレガスピ総督の視野に入ってきます。情報を集めてみると、マニラの方がセブよりも港集落の規模が大きく、中国船の入港もより頻繁であること、日本船、ブルネイからの貿易船も入ってくるなどが分かったのです。そこでレガスピ総督は、1570 年 5 月に、大隊長（マエストロ・デル・カンボ）のマルティン・デ・ゴイチを司令官として、兵士 100 人、ビサヤ人協力者 200 人が 2 隻のフリゲート船と 14~15 隻のプラウ、バランガイからなるマニラ遠征隊を派遣しました。ゴイチ司令官は、当時 3 人とい

われたマニラの王達のうちソリマンとマタンダの二人の王と面会、いつものようにスペインとの「平和と友好」関係樹立を提案しました。これに対しソリマン王が、「自分はスペイン人と友人になれて嬉しい。しかし、モロ（自分達）は刺青をした住民（ビサヤの人びと）とは違うことを、スペイン人は理解しなければならない。モロは他の住民が遭ったようないかなる虐待、凌辱にも耐えることが出来ない。それどころか逆に、モロの尊厳あるいは自尊心を汚したものには、最小限でも死をもって償ってもらおうであろう」と啖呵を切りました。そうして、王に対して貢納を要求しないことを条件にスペインの提案に同意、和平協定は成立しました。その後2人の王と司令官の3人は、地元の慣習に従ってそれぞれ自らの腕から少量の血を抜き取り、ワインに混ぜて互いに飲み合います。こうして協定は、確固不拔の血盟となりました。

これで万事成功裏に終わったかに見えましたが、翌朝、遠征隊が僚船に合図として発射した一発の大砲が仇となってソリマン王のモロ兵が大砲3発を打ち返し、戦闘勃発となりました。スペイン兵は瞬く間に矢来を破って要塞に突入、砲手を投げ飛ばして大砲を機能不全にし、集落に入って火を放ちました。この戦闘でマニラの集落は焼失しますが、ゴイチ司令官はその後2日間河口に船を停泊してモロ兵からのメッセージを待ちます。何の音沙汰もないので、帰途の風向きが逆風に変わるのを恐れて急いでマニラを離れました。

帰途の船上で作成されたと見られる「ルソン島占領条例」が6月6日付で公布されました。その内容の要点は、①大隊長は部下と共にマニラ川河口に漕ぎ出し、2人の王と和平を確認したこと、②しかし、マニラの王は裏切りの戦争を仕掛けてきて、われわれの住民協力者を拉致し負傷させ、われわれの方に向けて要塞から大砲を発射、2発が旗艦に命中したこと、③大隊長は、モロから身を守り、部下を傷つけるのを止めさせるため、モロの要塞を急襲、攻略、占領したが、これは正当な戦争であり、それによってマニラの町が獲得されたこと、④モロによると、マニラはルソン島の町々の中心ということであるから、大隊長は国王陛下の名においてルソン島とそこにある港、町を、事実上、所有、占領したこと、以上4点です。こうしてマニラおよびルソン島は、あつという間にスペインのものとなりました。

ゴイチ大隊長のマニラ遠征からほぼ1年後の1571年4月、レガスピ総督は周到なマニラ進駐準備の後に、修道会士、大隊長、諸隊長、火縄銃士、その他乗組員を含む大勢のビサヤ人協力者と共に、大小合わせて26~27隻におよぶ大艦隊を率いて、マニラ向けパナイ川河口を後にしました。5月中旬、レガスピ総督の大艦隊がマニラ港に到着すると、マニラの王の1人、ラカンドゥラ王がやってきて総督に1年前のモロ兵の不始末を詫び、他の二人の王についても赦しを請い、和解しました。総督はその後提案されたパシッグ川河口左岸の三角形の砂洲をスペイン人居留地として受け入れ、直ちに居留地建設に取り掛かり、6月には早々とそこにマニラ市制を敷きました。現在のイントラムロス地区がそれです。そこが、以後330年に及ぶスペイン植民地支配の中核となります。

マニラの王は早々とスペインを受け入れましたが、収まらないのはマニラ周辺地域の首長たちと住民です。マニラ北西部パンパンガ州マカビビから2000人のモロがトンドに結集して氣勢を上げるし、マニラの北方数キロの地点にあるブータス村では近隣住民が集まってスペインとの和平拒否を叫びました。やや遅れてパシッグ川上流、バイ湖に近いカインタの町でも、住民の和平拒否が力強く表明されました。マカビビの西方のベティスの町でも同じような住民の盛り上がりが起こりました。これらに対して総督は、100人前後のスペイン兵にパナイ島から連れてきた大勢の住民協力者を加えて和平拒否集落に送り込み、武力により制圧しました。マ

ニラ周辺部の制圧が終ると、さらに北部ルソン、東南部のビコールへ遠征隊を送り、ルソン島全体の制圧を進めました。

それに対して群島住民は、直接の応戦はもとより、待伏せ、裏切り、闇討ち、海賊行為などで反撃し、食糧供給拒否といった形で抵抗を続けます。

また、1571年にはコンキスタドールに対する報償としてエンコミエンダの譲渡が始まりました。委託する、頼むという意味の「encomendar（動詞）」を語源とするエンコミエンダとは、もとは国土回復戦争で功績のあった私的個人（コンキスタドール）に王室が与えた権利で、エンコミエンダ近くに住み、住民を守り、住民に精神的世俗的安寧を与える義務と住民から貢納を徴集する権利がセットになっていた、といわれます。しかし、コロンブスがエスパニオラ島で始めたものは、労働奉仕を期待して原住民を植民者に充当あるいは委託したものでした。したがって、フィリピンでもエンコミエンダは王室が委託する特定集落もしくは範囲の住民でした。高官になるほど充当される住民数は多く、4000人、6000人となりますし、少ないものでも1000人規模の住民が与えられました。そうして、住民を守る代わりに、貢納を国王に代わって徴集し、無償労働力の提供を受けることが許されました。これがエンコメンデロの奔放な搾取の温床となり、その後大問題となりました。それについては、時間も来ているようなので、機会を改めて報告させていただきたいと思います。

むすびにかえて

最後に、設定した課題に対する暫定的答えを簡単に付け加えさせていただきます。スペインがなぜフィリピン群島を占領したかという問題に対しては、第1に、フィリピンの地理的位置（貿易風帯）が大きく作用したと思います。マゼランがセブ島にやってきたのも、この東風がもたらしたものにすぎませんし、その後のモルッカ遠征隊が目的地に到達する前に悉くフィリピン群島東岸に接岸したのも、貿易風帯にあるからです。第2に、スペインがモルッカ諸島の香料をめぐるポルトガルとの競争に敗れたことです。その結果太平洋横断航路開拓によるヌエバエスパニヤ・西方諸島間交易確立に方針転換したことが大きく作用したと思われます。スペイン植民地支配開始と同時に始まり、その後250年間続いたガレオン船貿易がその実現形態です。第3にフェリペ2世の国王即位です。彼が帝国建設の野望を持っていたこと、西方諸島の中でも特にフェリピナスに注目したことです。

どう占領したかという問題については、上陸、居留地の確保・建設、占領条例公布、「平和と友好」提案の押し付け、和平・制圧行動を伴う食料調達、それに遠征隊派遣による武力制圧、と整理出来ます。制圧行動に際してスペインは、常に、多数の住民協力者（一般には住民志願兵と呼ばれている）を動員しています。住民協力者は、通常、その前に制圧された地域の住民です。レイテ島制圧にはセブアノを、マニラ制圧にはパナイ島のヒリガイノン、北部ルソンのイロコス制圧にはタガログを、といった具合です。制圧が行われる集落の状況は、戦国時代の日本の戦場と同じで、勝利した方が負けた側の全て、物から人までの全てを戦利品として持ち去ります。ですから、住民協力者はこの戦利品分配のおこぼれに預かれるわけです。藤木先生のお書きになった『雑兵たちの戦場』と同じ状況が繰り返されます。少数のスペイン人砲手と火縄銃士が飛び道具で敵対者を圧倒すると、応戦していた群島住民は最後には大抵逃げ出します。そこに同行した住民協力者（よそ者）が襲いかかり、殺戮、略奪、婦女子の拘束などやりたい放題をし、戦利品を掻き集めます。住民協力者は、この戦利品分配のおこぼれに与れ

るのです。このように、スペインの兵力不足を補うために群島住民を上手く利用したのも、占領過程の特徴の一つです。

以上です。

上田：はい。どうもありがとうございます。それでは、事実確認の質問等があればお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

聴講者 A：本田勝一さんの『マゼランが来た』っていう本が朝日新聞出版から 1988 年に出ている、それを読んでショックを受けました。マゼランはフィリピンで戦死するわけですけど、それまで行ったところで何をやったのかをかなり検証している。印象的だったのは、今はマゼランを倒した戦いが祭になっているのです。その写真なんかもいっぱい載っていて、非常に参考になりました。そのところで、現地の屈強な若者が「今彼らが来たら、おれがぶっ殺してやる」と言ったといいます。フィリピンは非常に親スペイン的だといいます、マゼランの開戦が祭になっている。これはフィリピンのナショナリズムの高揚などと無関係ではないと思います。その辺はどうでしょう。

梅原：これには両面あります。ナショナリズムに立てば、やはりスペインがけしからんとなります。したがって、マゼランを倒したマクタン島首長ラプラプは英雄となり、銅像建立となりました。これは確かマルコスの時代の 1979 年だったと記憶しています。あのころフィリピンではナショナリズムが強くなり、マルコス大統領はこのナショナリズムをうまく使おうとしました。それ以前に、あそこのラプラプ像の裏側というか後方にマゼランの塔が建てられています。そこにはスペインを評価する碑文が書かれています。それは 19 世紀、あるいは 18 世紀の建立です。フィリピン人にとって実に悩ましいところです。

上田：なるほど。今の政治ともだいぶいろいろ絡んでいるのですね。また後半で、いろいろ議論したいと思います。

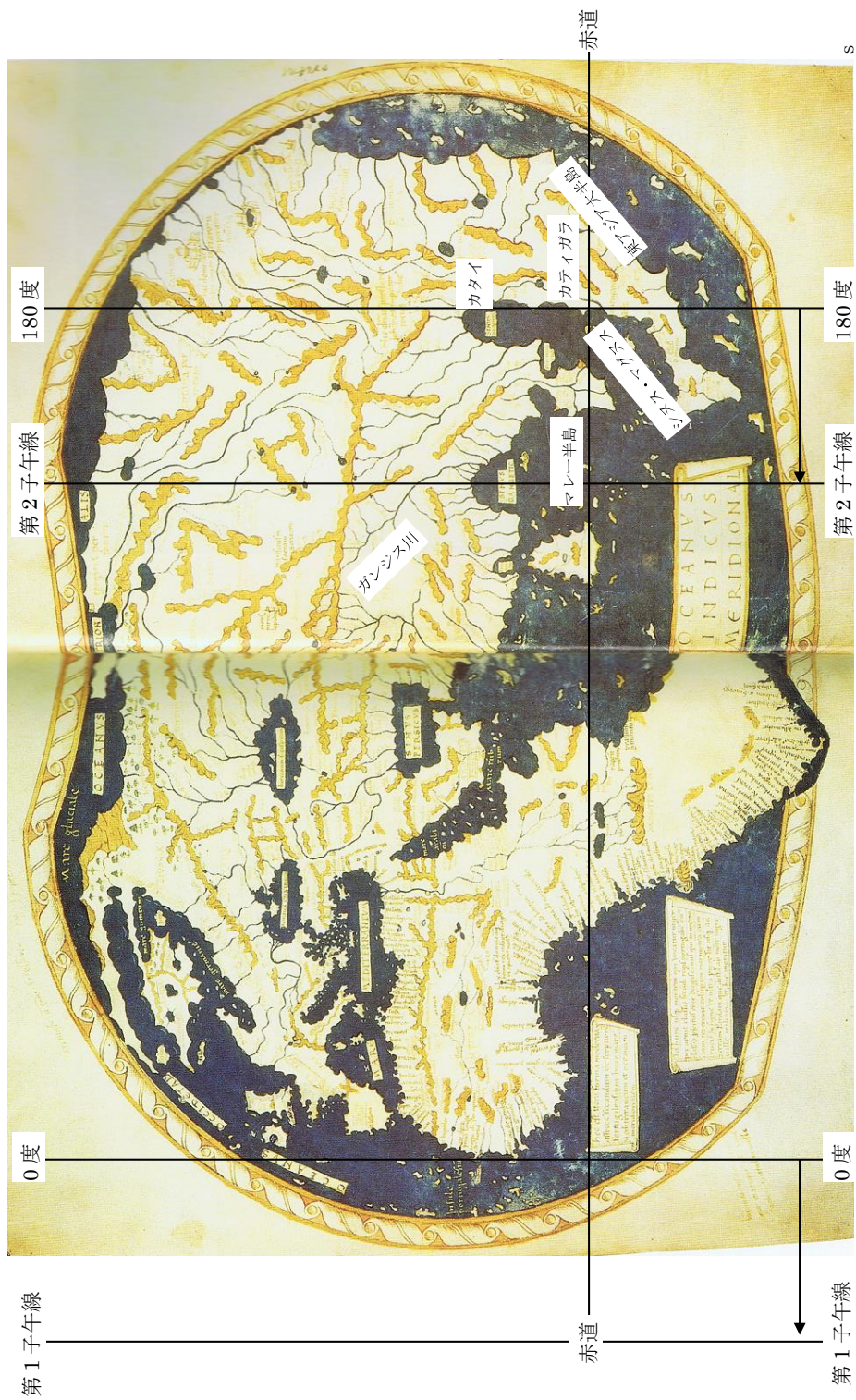


図1 エンリクス・マルテルスの世界地図 (1489年ごろ)

[増田義郎『マゼラン—地球をひとつにした男』(原書房、1993年)より報告者加筆]

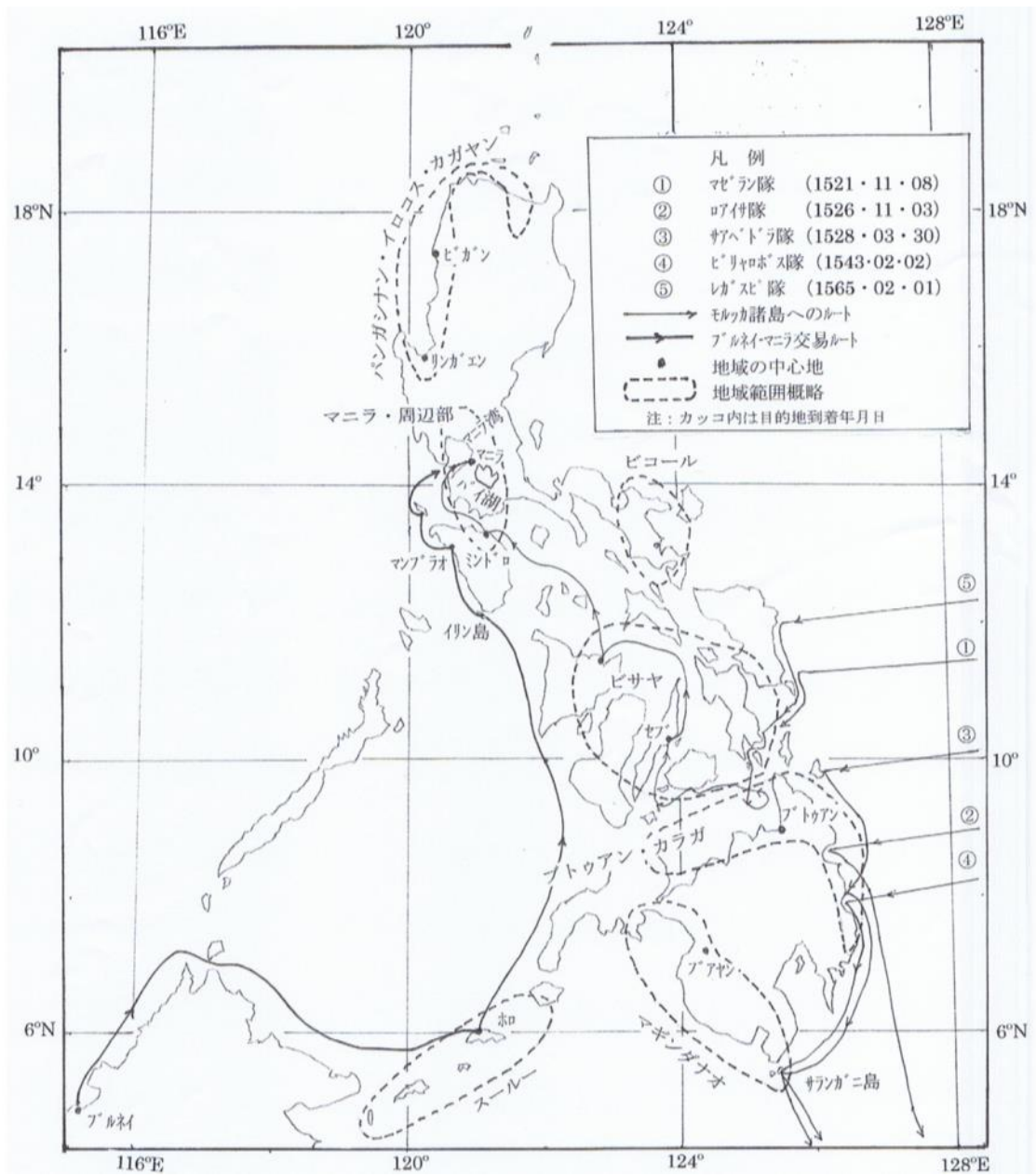


図2 スペイン到来時のフィリピン群島

資料1 スペインのフィリピン占領年表

大航海時代初期

1469	カスティリヤ女王イサベルとアラゴン王フェルナンド2世の結婚によりスペイン王国成立
1488	バルトロメ・ディアス、喜望峰到達
1492	コロンブス(1451-1506)、西インド諸島に到達
1493・05・04	教皇勅書
1494・06・07	トルデシリャス条約
1497~98	バスコ・ダ・ガマ、喜望峰回りインド航路発見
1500	カブラル、ブラジル到達
1503	イサベル女王、セビリヤに通商院 Caza de Contratacion 設立
1509	ポルトガル艦隊、インドのディーウ沖でエジプトグジャラティ艦隊を撃破
1510	アルブケルケ(アルメイダの後任副王)、インド・ゴア占領
1511・07	アルブケルケ隊(マゼランも加わる)、マラッカを包囲(6週間)、占領(8月)、部下に3ヶ月間市内の略奪を許す
1512	アブレウ隊モルッカに向かうが、バンダ、アンボン、セラム島まで、同隊からはぐれた Francisco Serrano が初めて香料群島(テルナテ)に到達
1513	バスコ・ヌニェス・デ・バルボア、南米ダリエン山頂からもう一つの大海(太平洋)を確認
1514	ポルトガル船が初めてモルッカに到着、貿易を開始

Ferdinando Magellan 遠征隊(1519~22)

1519・08・10	マゼラン遠征隊(5隻、総トン数480t、兵士・乗組員277人)、モルッカ諸島の香辛料を求めて、セビリヤを出発、(Trinidad, San Antonio, Concepcion, Victoria, Santiago)
09・20	サンルカール・デ・バラメーダ出発
09・26	カナリア諸島(Tenerife 島)到着、ここで生鮮食料(肉・魚)・水・木材を積み込み、10・03 同島出発
11・29	サンアグスチン岬(ブラジル)沖通過
12・13	ベルチン(リオデジャネイロ)港に到着、12・26 同港出発
1520・01・12	リオデラプラタ河口に到着、河川を遡上して太平洋への抜け道を探る
03・31	サンフリアン湾に入り約5ヶ月間ここに留まる。この間、反乱発生、鎮圧
08・24	同湾を出ると同時に暴風に遭遇、急遽、サンタクルス河口に退避、10・18 同河口を出る
11・01	マゼラン海峡入口に到達、水路発見までに20数日を要す。この間、サンチャゴ号沈没、サンアントニオ号失踪
11・28	マゼラン海峡を抜けて太平洋に出る(3隻のみ)
1521・03・07	ラドロネス(現マリアナ)諸島
03・16	現サマル島南端(北緯11度)に接近、浅瀬が多くて投錨できず、ホモンホン島に上陸、約1週間停泊、
03・28	リマサワ島沖に停泊、7日間滞在、03・31 ここで最初のミサを行なう
04・04	リマサワ島をセブ島に向けて発つ
04・07	セブ港に到着、セブ王入港税支払いを要求、マゼラン拒否
04・09	セブ王との間に友好・和平協定成立
04・14	セブ王以下約800人を洗礼
04・27	マゼラン、セブ王に従わない首長ラプラブ征伐のため40人の兵士を率いて

- マクタン島に向かう、総勢 1500 人を超えるラブラブの兵士と戦い戦死。
- 05・01 王に招かれた 24 人が闇討ち、残る隊員 (約 120 人) は直ちにセブ港出帆
 - 05・02 ボホール島西部でコンセプション号を焼却、ボホール海峡南下サンボアング半島のキピット、カガヤン・スルー、パラワン、ボルネオ島に向かう。
 - 07・09 ブルネイ港入港、07・15 ブルネイ王の歓待を受ける
 - 07・27 ブルネイからバンギ島に行き、42 日間かけて船の修繕を行う
 - 09・27 バンギ島を発ってカウイト、シバゴ、カバルソ、サンギル、タラウドを経て 11・08 チドール島着
 - 12・21 老朽化の進んだトリニダッド号を残してビクトリア号のみが、西回りでスペイン帰還の途に付く
 - 1522・01・08 マルア島、01・25 ティモール島を経て、ケープタウンに向かう
 - 04・06 トリニダッド号、中米ダリエン地峡向け帰還を試みる。北東方向に進みグアムを過ぎて東に向を変えたら東風に阻まれ、北緯 43 度まで北上したが、食料が底をつき航行を断念、10 月初めモルッカに戻る
 - 05・06 ビクトリア号、ケープタウン沖を通過、07・09 カーボベルデ諸島、
 - 09・08 Victoria 号と乗組員 18 人、セビリヤに帰還
 - 12 ポルトガル、テルナテ島に要塞建設
- 1524 末～1525 初め ポルトガル、モルッカ全体を統制下に置くためチドール島攻撃

Garcia Jofre de Loaisa 遠征隊 (1525～26)

- 1525・04・05 ロアイサ、モルッカ遠征隊司令官、モルッカ地区知事に任命される
- 07・17 ロアイサ船隊 (7 隻、総トン数 1212 トン、兵士・乗組員 450 人)、ガリシア地方の Coruna 港をモルッカ諸島向け出帆 (Victoria, Santi Espiritus, Anunciada, San Gabriel, Parral, San Lesmes, Santiago)
- 08・02 カナリア諸島ゴメラ港着、肉、薪、水を積み込み 08・14 出帆、アフリカ西海岸を南下
- 10・20 ギニア湾の Annobon 島に立ち寄り新鮮な水と薪を確保、破損船の修理
- 12・05 リオデジャネイロ沖通過
- 12・28 旗艦が消息を絶つ。5 隻が 2 日間搜索するが見付からず
- 1526・01・19 (南東からの) 強風発生、Santi Espiritu 号難破、02 初旬に Anunciada と San Gabriel 逃亡
- 02・24 Victoria、サンタクルス河口に引き返して他船を待つ、集まったのは Parral, Lesmes, Santiago の 3 隻
- 03・23 旗艦の修理と Parral, Lesmes, Santiago の補修完了、河口を離れて海峡通過再挑戦
- 04・05 4 隻が海峡入る、12 日には第 3 海峡近くで逆風で前進不能、05・06 最終地点に近づくが押戻される
- 05・26 悪戦苦闘の末、マゼラン海峡通過、4 隻がそろって太平洋に出る
- 05・31 南緯 47 度地点で猛烈な暴風雨に遭遇、船隊離散、06・08 暴風が静まって気付けば旗艦のみ (Santiago は後述、Parral はそのまま西進してミンダナオ島東岸にたどり着き、サンギへ諸島で遭難)
- 07・30 暴風以後死者続出、ロアイサ司令官死去、08・06 後任の司令官デル・カノ (元マゼラン隊員) も死去
- 08 中旬 ロアイサ隊からはぐれたサンティアゴ号、南米チリ沖から北上してテワントペック近くに漂着、アリエサガ、コルテスと面会、一部始終を話す
- 09・04 Victoria、グアム島に到着、食料・水を補給して 09・10 に出発
- 10・06 ミンダナオ島東岸の Lianga 湾 (8 度 40 分) に到着、食料不足深刻化
- 10・15 同湾をセブ島向け出発、しかし北東風に阻まれて南下、モルッカに向かう

- 11・03 Victoria、ハルマヘラ島北部の Zamafo に到着
- 1527・01・01 チドール島に移る、スペイン要塞建設
- 01・17 ポルトガルとの小競合い続く、ポ軍の攻撃でビクトリア号被弾・損傷→唯一の大洋航行可能船を失う
- 05 メネセス、スペインにモルッカからの退去命令

Sebastian Cabot 隊の遠征 (1526~31)

- 1526・04・13 カボット隊、船4隻と兵士・乗組員150人で、ロアイサ隊支援とモルッカ諸島占領のためサンルカル港出発、カナリア諸島経由ベルデ岬諸島、ブラジルの San Agustin 岬を目指す。
- 1527・02・27 ラプラタ川河口の小島に船を泊めて同河川上流部、奥地に入り銀鉱を求めて探検・調査(4年間)
カボット、帰国。直後4年間オラン(アフリカ北岸)に追放、1557年世界

Alvaro de Saavedra 遠征隊 (1527~28)

- 1526・06・20 コルテス、王室布令によりトリニダード号と乗組員、ロアイサ隊、カボット隊、モルッカ諸島情勢の情報収集のためヌエバエスパニャから遠征隊を出すよう命令される
- 1527・05 コルテス、従兄弟のアルバロ・デ・サアベドラを遠征隊司令官に任命
- 10・31 サアベドラ遠征隊(3隻の船—Florida, Victoria, Brig.—と兵士・乗組員105人)、メキシコ西海岸の Zihuatenejo 港を香料群島向け出帆、数日と経たないうちに Florida 号の漏水が始まる
- 12・15 強烈な暴風に遭遇、船隊ばらばら、旗艦 Florida のみとなる
- 12・29 Ladrones 諸島が視界に入る、2日後ヤップ島に投錨、8日間滞在
- 1528・02・01 ミンダナオ島と周辺の島々が視界に入る、翌日シアルガオ島(9度50分)に投錨、天候不良でここに3週間滞在、この間、Florida を浜に引き上げ海水漏入部分を修理、住民とのトラブルもあり
- 02・23 モルッカ諸島に向けてシアルガオを出発
- 02・28 南下の途中、カテエール湾でロアイサ隊 Parral 号乗組員を発見
- 03・03 食糧補給にサラングニ島に立寄る。奴隷にされた2人のロアイサ隊員を発見、身代金を支払って解放
- 03・20 モルッカに向かう、03・30 Zamafo, Gilolo を経てチドール島に着く
- 06・14 サアベドラ、ヌエバエスパニャ帰還を目指してチドール島を出発(迂回による食料使い果たしとグアム島東方での強烈な北東風に阻まれて、10・19チドール島の戻る)
- 1529・04・22 サラゴサ条約(①ス国王がモルッカ諸島をポ国王に抵当設定、②トルデシリャス条約の第1子午線の反対側に第2子午線を設ける)
- 05・03 サアベドラ、再び帰還に挑戦するも、北緯30度付近の北東風に阻まれ、12・08 サマフォに戻る
- 10 サアベドラ、死亡
- 10・28 ポルトガル、チドール島のスペイン要塞を占領、デ・ラ・トーレ率いるスペイン隊はサマフォに撤退
- 1534・02 デ・ラ・トーレと9人、インド経由スペインに帰国
- 1535 ウルダネタ他スペイン人全員がインド経由スペイン帰国

Ruy Lopez de Villalobos 隊 (1542~46)

- 1542・09・18 副王から遠征隊に対する指令：①西方諸島に拠点確保、②帰還ルート確立
11・01 ビリアロボス遠征隊、船6隻 (Santiago, San Jorge, San Antonio, San Juan, San Cristobal, San Martin)、兵士と乗組員合わせて約 400 人で西海岸の Puerto de la Navidad を出帆
- 1543・02・02 ミンダナオ島東岸、北緯 7 度 40 分のカテエール湾に到達、しかし北東風によって Baculin 湾まで押し流される、約 1 月間そこに滞在
03 初め リマサワ島に根拠地建設を目指して出帆、北東風と天候不良に北上を阻まれる、食料不足、栄養失調で病人が続出、
03 下旬 北上を断念、食料を求めて南下するが集落は見付からず、結局サランガニ島に到着。住民の強い敵意と食料販売拒否に遭い、ビリアロボス武力行使を承認、一戦を交え島民を追い出し家財や食料を略奪
04・02 島の先端部に居留地建設、しかし食糧難は解消せず、隊員の飢餓、疾病が進行、死者続出
そんな最中に、コタバト川一帯に食料豊富地域ありとの情報が入り、直ちに食料購入のため San Juan 号を派遣するも、住民の敵意に直面、撤退を余儀なくされる。サランガニへ引き返す途中 Bimian で収穫途中の水田を襲いコメを確保、その後もここで略奪を繰り返し自分たちの生命維持を計った
07 ころ 太平洋ではぐれた San Cristobal 号がレイテ、リマサワ経由でサランガニ到着、友好的住民と豊富な食料の情報をもたらす。司令官は食糧確保のため南のサンギル島に向かい、途中の小島 (Kawio 諸島の一つ?) に投錨、住民と戦争になり皆殺し、間もなくして暴風に遭い San Antonio 号座礁・難破する
08・04 スエバエスパニヤ帰還のための San Juan 号が、食料積み込みのためタンダヤ・アブヨ (現サマル・レイテ) に向けて出発、それにガリオットの San Cristobal が同行、このときタンダヤ、アブヨ島を、ビリアロボスが当時のスペイン皇太子フェリペに因んで Las islas de Felipinas と命名、後に全群島に適用されるようになる
08・26 San Juan 号、ナビダッド向けレイテ島出帆 (北緯 30 度付近まで北上、強風に遭遇、船が小さいために航行不能、11 月初めにレイテに戻る)
10 末 San Cristobal、大量のコメをレイテ島からサランガニに持ち帰る
11 ころ ビリアロボス、レイテ島に根拠地建設を決心、出帆するが、船は途中北東風に阻まれて前進できず、マヨ湾に避難してチャンスを伺う。そこに先発の San Gabriel が現われ、前進不能を告げる
- 1544・01 度重なる不運に疲れたビリアロボス、北上を諦め南の香料群島に向かう
03 ビリアロボス、サマフォからチドール島に移る
- 1545・05・16 San Juan、帰還のためチドール島を出発、逆風に遭い航続を断念、10・03 チドールに帰る
- 1546・02・18 ビリアロボス、ポルトガル船でインドに向かう途中、アンボン島で死す

Miguel Lopez de Legaspi 遠征隊 (1564~1565)

- 1554 Lavezaris、Council of Indies において、Felipinas (レイテ、サマル) がアジアからスエバエスパニヤ西海岸への帰還計画拠点およびモルッカのポルトガル対抗拠点としての適切性を強調、その強奪と占領を助言する
- 1556 カルロス 1 世、執権を息子 Felipe に移譲
- 1559・09・24 フェリペ 2 世、副王ベラスコに西方諸島遠征計画の早期実施を命じる
- 1560・05・28 ウルダネタ神父、次回遠征計画参加要請を受諾
- 1561・02・09 ベラスコ、遠征隊司令官にレガスピを推薦

- 1562～63 ポルトガル-テルナテ混成隊が食料を求めて周辺の島々を襲撃、住民がヨーロッパ人を極度に憎悪し怖がるようになる
- 1564・08末 Audencia の秘密会議にレガスピを招き、国王の命令(フェリピナスに永久居留地建設)を告げる
- 11・21 レガスピ隊、4隻(San Pedro, San Pablo, San Juan, San Lucas)、総トン数1020t、兵士・乗組員380人で Puerto de la Navidad 出帆、最初南西方向に進み北緯9～10度まで下がって真西に50日間航行、途中、ミンダナオ島着を避けるために13度付近まで北上、航行は極めて順調(ただし、San Lucasは12・01に姿を消し、翌年08・09ナビダッドに戻る)
- 11・26 幹部会議で遠征の目的地が明かされる
- 1565・01・21 ラドロネス諸島のグアム島に投錨
- 02・01 ころ フェリピナスが視界に入る、同日午後サマール島東岸 Oras(Tubabao 島の奥、12度10分)湾に投錨、食料を求めて7～8日間滞在、失敗
- 02・09 同湾を発ち、食料が豊富とされる Tandaya (サマール)、Abuyo (レイテ)島を探す
Cagiungo (Hinunangan) 湾に停泊、ボートで川沿いに Cabagnon 村まで遡行、住民は敵対的
- 03・05 Cavalian 湾に入り湾岸集落のある首長の息子と血盟関係を結ぶが、住民はここでも敵対的、食料買付けに失敗、ウルダネタ神父が武力行使を容認、100人以上の乗組員が村を襲って食料、家財を略奪
- 03・11 Canuguinen (Camiguin) 島東北沖に停泊して様子を伺うが、ここでも住民は敵対的
- 03・15 外国船の出入りがあるといわれる Butuan に向かったが、風向きと潮流が逆のため流されて Bohol 島南岸 Loay に着く。ボルネオの貿易船長の仲介で首長 Cicutuna および Cigala と血盟による友好関係樹立。ここを拠点に旗艦のボート (fragata) で周辺を偵察、セブ島行き準備をする。
- 03・19 San Juan 号をブトゥアンに向かわせ、首長に会う (04・04 Loay に帰る)
- 04・12 遠征隊幹部会議で、ヌエバエスパニャ帰還に San Pedro 号を使うことと、居留地建設地点をレイテ島カバリアンに決定 (肥沃で食料豊富、帰還の出発点として位置の良好さ、スーゴッド湾に良港あり)
- 04・20 遠征隊総会で居留地点再考、最終的にセブ港に決定
- 04・22 レガスピ隊、ボホールを発ってセブに向かう
- 04・27 セブ港に入港、直ちに通訳を海辺に送り来訪の目的と首長との面会を要請
- 04・29 1日半待ったがセブ王は現れず。そこで総督は、大隊長、公証人、神父、通訳を派遣してセブ王に遠征隊の意図 (和平と友好) を伝え、受容れ要請。しかし住民のあるものは家財をまとめて運び出し、別のものは武装して戦闘準備、付近の島々からの援軍を含めて住民約2000人が港の護岸に立ち並んだ。戦闘開始、遠征隊の大砲の轟音と破壊力に住民は驚愕、山地部に向かって逃亡、直後に集落で火災発生
- 05・08 セブ島占領条例公布、居留地建設開始
- 06・01 San Pedro 号、ウルダネタ神父を乗せてヌエバエスパニャ向け出発 (10・08 アカプルコに無事帰還)
- 06・02 住民との本格的和解交渉始まる
- 06・04 Tupaz 王と数人の首長および従者 (50人以上)、要塞を訪ねて和解成立
- 09末 食糧確保のため De Saz、Goiti 隊長と兵士100人、地元協力者をネグロス島に派遣、成果ゼロ
- 11・27 食料不足と耐乏生活に耐え切れない乗組員、反乱を計画、実行直前に発覚。総督、部下の武力行使容認

- 1566・04 サゴやし集めに **De Saz** をブトゥアンに派遣、成果なし。06 急遽パナイ島に回り大量のコメを持ち帰る
- 10・08 マドリッドで国王召集の専門家会議開催、モルッカ、フェリピナスがトルデシヤス条約の分割子午線の内側か外側か、またフェリピナスはサラゴサ条約の抵当設定範囲に入るか否かについて慎重審議
- 10・15 スエバエスパンヤからガレオン船 **San Geronimo** がセブ港到着、サンペドロ号の帰還成功を告げる
- 11 初旬 **De Saz**、ミンダナオ島 **Kawit** にシナモン買付けに出掛けるが、カウイト沖でポルトガル艦隊に出会い急いでセブ港に引き返す、11・19 ポルトガル船、セブ港付近にも出沒
- 1567・02 デ・サス、シナモン調達（次回帰還船の土産）にカウイトに向かう。6 週間後帰りの船で病死
- 07・10 支援要請状をもってデ・ラ・イスラ、**San Juan** 号でスエバエスパンヤ向け出帆（11 月、無事帰還）
直後に、ポルトガル船 2 隻が総督宛書状をもって到着（内容：フィリピン諸島はカルロス 1 世によりポルトガルに対して抵当設定された範囲にあるため直ちに撤退して、テルナテに来られたし）
- 08・20 **San Pedro** と **San Lucas** 号、アカプルコからセブ港に到着、兵士、武器、弾薬、必要装置が補強される
- 1568・03・21 セブ王トゥパス、キリスト教に改宗
- 07・01 **San Pablo**、セブ港出帆、途中グアムに立ち寄り暴風に遭遇、船体損傷、セブに引き返す
- 09・28 ポルトガル艦隊、セブ港を封鎖（西口のみ）
- 10・15 レガスピ総督とペレイラ司令官の直接対決
- 10・21 ペレイラ、3 日以内の群島からの撤退を要求（完全封鎖の最後通告）
- 1569・01・01 突然、封鎖解除（ポルトガル艦隊で腸チフス蔓延のため）
- 06・07 **San Lucas**、スエバエスパンヤ向け出発、11 月にアカプルコ着、
- 07 中旬 根拠地をセブからパナイ島パナイ川河口付近（現カピス市）に移す
このころブルネイ王の命令によりスルー諸島のモロがセブ島南部の 20 ヶ村を襲撃、首長他大勢を拉致

隊長 J.サルセドのミンドロ島遠征

- 1570・01 パナイ島北西部の首長、総督にミンドロ島海賊襲撃からの防御を嘆願
- 04・20～05・01 サルセド隊長、兵士 40 人と共にバランガイ船 14～15 隻で遠征
ミンドロ島西南部のイリン島、北西部のマンブクラオ町、ルバング島のモロ要塞を破壊、住民平定

大隊長ゴイチのマニラ遠征

- 1570・05・08 大隊長、兵士 100 人、現地住民 200 人と共に、2 隻の **Fragata** と 14～15 隻のバランガイでマニラ向けパナイ川河口出発
- 05・13 ミンドロ島東岸 **Bato** (**Butas?**) 川河口 **Lumang Bayan(?)** に停泊中の中国船 2 隻を襲撃、略奪（後に隊長が弁済）
- 05・14 ミンドロ港着、住民、遠征隊と睨み合いの後和平に同意、貢納を支払う
- 05・16 バラヤン湾奥バラヤン町手前で後続の船を待つ
- 05・18 マニラ湾に入り **Sangley Point** 辺りで船を止め、伝令を送ってソリマン王と友好関係樹立を要請
- 05・21 同意の返事が返る
- 05・22 ゴイチ大隊長が下船、ソリマン王と面会、王は「スペイン人と友人になれて

嬉しい。ただし、我々は刺青をした現地人(ビサヤ人)とは違うことをスペイン人は理解しなければならない。我々は別の人たちが遭っているようないかなる虐待、凌辱も許容せず、我々の名誉に関わる最も小さなことでも、犯したもには死をもって償ってもらおうであろう」と啖呵を切った。周辺のモロは武器をもっていつでも戦闘態勢に入れる雰囲気であった。

- 05・23 王の使いが伝言を持参。内容は、スペインが王に対して貢納を要求するのであれば、スペイン人のパシッグ川への入港を認めない、というものであった。それを聞いた大隊長は、それは要求していない、直ちに会う必要があるといつて下船、要塞に入って王に面会、事情を説明した後、伝統的方法による友好協定(血盟)を結んだ。しかし、パシッグ川右岸河口のラカンドラ王がスペイン撃退に動いており、最初の雨を合図にスペイン襲撃が始まるとの情報が出た。スペイン側も全員戦闘態勢に入った。
- 05・24 午前 10 時、はるか彼方に多くの船がこちらにやってくるのを見て大隊長は偵察のためにプラウを送った。しかし、小船はタパケ(非戦闘用)であることが分かりプラウが攻撃しないように合図として大砲 1 発を海に向けて発射した。これに驚いたモロ兵達は直ちに大砲 3 発を打ち返してきた。うち 1 発がスペイン船に命中、反撃に出る。瞬く間に矢来を突破、要塞に入って集落に火を放った。1000 人をこえるモロ兵は火縄銃、大砲の威力に圧倒され、海上もしくは陸上を遁走した。集落は全焼、戦死者 100 人、捕虜 80 人、その他多数が逃走中の船上で死亡した。
鎮火後要塞で大砲、鑄造所、粘土と蠟の鑄型、17 フィートの砲銃身などが見付かる、全て没収
- 05・31 大隊長ゴイチ、マニラ焼失後 2 日間、河口に停泊してモロからのメッセージ(全面降伏)を待つが音沙汰なし、風向きが変わるのを恐れて急いでパナイ島への帰路につく。負傷しているサルセドを先に返し、ゴイチは貢納未徴収分を徴集のためミンドロ島に立ち寄る。
- 06・23 デ・ラ・イスラ、国王からレガスピ宛の手紙を持ってパナイ島に戻る(アカプルコを 03・09 発)、内容は、フィリピン占領、エンコミエンダ分与を国王が正式承認、兵士・支援物資、支援継続の知らせ
- 06 下旬 ゴイチ大隊長一行、パナイ島に帰る
- 07・27 大隊長のマニラ遠征成功と国王の占領承認に触発されて更なる勢力拡大を視野に入れたレガスピは、国王からの更なる支援と協力を要請するため、デ・ラ・イスラを再びヌエバエスパニャ向け出航させる

レガスピ総督のマニラ進駐

- 1570・11・17 総督、居留地のスペイン人町(Santisimo Nombre de Jesus)切替えのためセブに向かう。パナイ島に帰ってからはマニラ進駐の準備
- 1571・04・20 レガスピ総督、エレラ師、大隊長、隊長、230 人の火縄銃士と共に約 300 人のビサヤ人協力者、26~27 隻の大艦隊を率いてパナイ川河口を発つ
- 04・22 ミンドロ島着、ここに 15~16 日間滞在、05・07 ミンドロ港発
- 05・16 マニラ湾のカビテ港に停泊、すると 2 隻のバンカがパシッグ川河口から現われて船団に近づき検閲。
- 05・17 知り合いの男が小船に乗って総督のいる旗艦を訪ねる。彼によると、2 人の王は和平に賛成だが、3 人目のソリマン王は抵抗する様子とのこと。
- 05・18 レガスピの大船団が河口に近づくと、それを見たマニラの住民は集落に火を放ちパシッグ川対岸のラカンドラ王の村に渡った。夕方になり、ラヤ王とラカンドラ王とが小船に乗って総督の旗艦に近づき、歓迎の意を表明、ソリマン王に代わってスペインとの友好を懇願、前年の大隊長に対して部下の働い

- た不始末を詫び、赦しを乞う。これに対し総督は、自分たちの進駐の趣旨と居留地の必要を述べる。
- 05・19 総督一行はマニラに下船、3人の王と会談、友好関係とスペイン人居留地を確認、その後パンパンガのマカビビから2000人の回教徒が40隻の小船でトンドに集結、3日間威嚇を続ける。
 - 06・03 ソリマン、ゴイチとのバンクーサイの戦いに敗れて死亡
マニラ周辺のブータス村の征伐
パンパンガ州 Betis 村の反抗と鎮圧
 - 06・24 スペイン法にもとづきマニラ市設立（1573年、新市に関する条例制定）
 - 08・15 パシッグ川上流カインタの反乱鎮圧
ゴイチ、マニラの北部(湾岸)地域を征服。サルセド、マニラの南部(バイ湖岸、バタンガス)地域を征服
 - 08 下旬 San Juan および Espiritu Santo、兵士、補給物資を運んでパナイ島着
 - 1572・05・20 サルセド、1年かけて北部ルソンを征服
 - 06 ガレオン船 Espiritu Santo、アカプルコからマニラに到着
 - 08・12 Santiago、San Juan 号、アカプルコ向けマニラを発つ
 - 08・20 レガスピ総督、心臓発作で倒れ、翌日死去
 - 08 下旬 ラベサリス、総督代理に就任、以後エンコミエンダを積極的に分配、悪評を買う
 - 12 強大なスペイン・住民混成軍をパンガシナンとイロコスに巡回派遣、大量の金を調達→強奪巡回と非難
 - 1573・02 サルセド、ルソン島南部制圧命令を受けスペイン人兵士120人と住民志願兵を引き連れて出発、5ヶ月でビコール地方制圧、カタンドゥアネス島の海賊本拠地粉碎に成功
 - 1574 前半 イロコスにスペイン人居留地建設を命令→Villa Fernandina（現ビガン）誕生
 - 11・29 中国人海寇リマホン、活動拠点確保のために70隻の大型ジャンクでマニラ沖（バタアン半島マリベレス）に現れる。翌朝、600人の精鋭部隊でマニラを急襲、応戦中ゴイチ大隊長殺害される
 - 12・01 1500人を送り込んで再攻撃、イロコスから急遽引き返したサルセド隊が参戦、形成が一変する
 - 12・02 リマホン、マニラ占領を諦めてリングエンに戻る
 - 1575・03 下旬 サルセド隊長率いる大遠征隊、リマホンを追ってリングエンに向かう
 - 03・31 リングエン到着、要塞攻撃開始
 - 08・03 リマホン逃亡

参考文献

- Andaya, Leonardo Y., *World of Maluku: Eastern Indonesia in the Early Modern Period*, Univ. of Hawaii Press, Honolulu, 1993.
- Blair, Emma Helen & Robertson, James Alexander (eds.), *The Philippine Islands 1493-1898*, 55 vols., Cleveland, The Arthur H. Clark Company, 1903-05. (Reproduced by Cachos Hemanos, Inc. in Mandaluyong, Rizal, 1978). Vols. 1, 2, 3, 6, 7, 33, 34.
- Bayer, H.O. & J.C. de Veyra, *Philippine Saga: A pictorial history of archipelago since time began*, Capitol Publishing House Inc., Manila, 1952.
- Bulbeck, D. et al. eds., *Southeast Asian Exports Since the 14th Century Cloves, Pepper, Coffee, and Sugar*, ISEAS, Singapore, 1998.
- Fisher, C. A., *South-east Asia: A Social, Economic, and Political Geography*, Mathuen Co. Ltd., London, 1964.
- Noone, Martin P., *The discovery and conquest of the Philippines 1521-1581*, Historical Conservation Society, Manila, 1986.
- Patanne, E.P., *The Philippines in the 6th to 16th Centuries*, LSA Press Inc., Metro Manila, 1996.
- Scott, W. Henry, *Prehispanic Source Materials for the Study of Philippine History*, New Day Publishers, 1984.
- *Barangay: Sixteen-Century Philippine Culture and Society*, Ateneo de Manila University Press, 1994.
- 生田 滋『大航海時代とモルッカ諸島：ポルトガル、スペイン、テルナテ王国と丁子貿易』中公新書、1998年
- 岡本良知『中世モルッカ諸島の香料』東洋堂、1944年
- 合田昌文『マゼラン：世界分割を体現した航海者』京都大学学術出版会、2006年
- 長南 実訳『マゼラン最初の世界一周航海』（岩波文庫）2011年
- 増田義郎『マゼラン—地球を一つにした男』原書房、1993年

小西：漫談のように聞いていただきたいと思いますけれども、大変大風呂敷を広げまして、広いユーラシア大陸をどのように区切ってとらえるか。それからまた、本来私は考古学をやってきたことから、今から 5000 年前以来の歴史的な流れをも踏まえて、南アジア世界というのがどのように形成されてきたかというのが私の関心事でありました。

それで、この南アジア世界なるものをどうとらえるか。難しい問題です。ただこれまでは、ただ一言「インド」言われてきた世界が、「南アジア」という、もう少し広い、ユーラシア大陸の中でどのような位置を占めるかということを考えてい。そしてそれに当たっては、かつて梅棹忠夫先生が『文明の生態史観』という本をお出しになって大評判になりましたが、生態系などをも視野に入れて地域をとらえる必要があるのではないかということです。

まだ私も若かったころですが、1971 年に松田寿男先生が『アジアの歴史』という大変優れた本をお出しになりました。ブックレットのような本ですが、大変インパクトの強い本でありまして、その先生が、例の玄奘三蔵の「大唐西域記」の序文をとりあげ、そこでアジアが 4 つの国からなっていることに注目しました。当時はまだアジアなんて言葉は使っていませんが、北の馬主（国）、西の宝主、東の人主、南の象主という 4 つがあがっているのですが、それを松田先生は地文的に斜めに切ると乾燥アジアと湿潤アジアに分けられると。また人文区分として

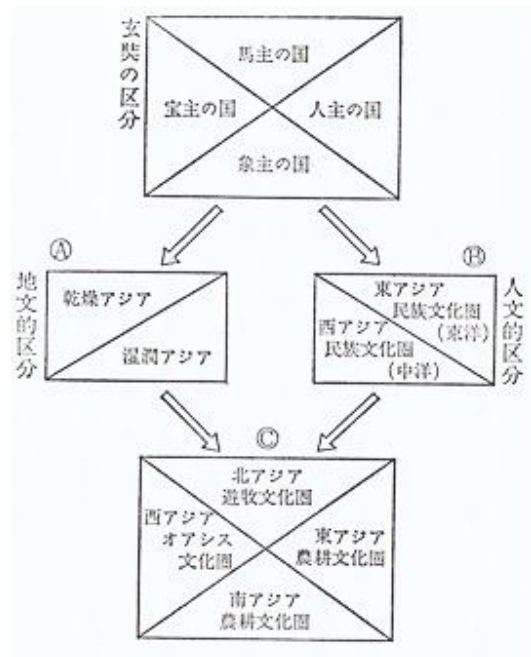
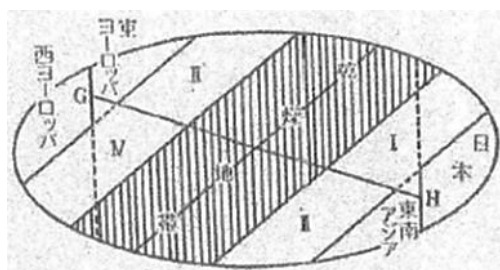


図1 アジアの四大文化圏

(松田寿男氏原図) [松田 1971]



I：中国世界；II：インド世界；
 III：ロシア世界；
 IV：地中海・イスラーム世界
 (梅棹忠夫氏原図)

図2

は東アジア民族文化圏と西アジア民族文化圏、これは東洋と中洋という言い方をしておられますが、これまた違う角度で斜めに切って、それらをすべて重ね合わせて言い換えると、北アジアの遊牧文化圏、西アジアオアシス文化圏、南アジア農耕文化圏、東アジア農耕文化圏となるという(図1)。面白い発想だと思いました。これを先の梅棹さんの図に重ねてみますと、これまであまり重要視されてこなかった乾燥地帯をものすごく大きく取っている(図2)。そしてそこには中国(I)とインド(II)の一部がそこに入る。すなわちインド世界を見てみると、西ないしは北西部が乾燥地帯

に引っ掛かり、それから南東が東南アジア、すなわち湿潤の海に引っ掛かるという、そういう世界がインド世界だということが見てとれる。とすれば、この図をどのように展開するかというのが、一つの大きな課題になってくると思います。

その前に、古代インドの人たちがインド世界というものをどのようなイメージでとらえていたかということ、ちょっと4つほど例を挙げてみました。古いところから言うと、エラトステネース、前4世紀末のもの(図3左上)。これはもちろん、中に書かれた地図は今の地図を使っていますので、彼がこんな形にインドをとらえていたわけではありませんが、距離が出ているのです。こういうひし形をした枠組みです。このひし形は、

大事にしていこうと思いました。それから、どうしても地理学の歴史から言っても、プトレマイオスの地図というのが必ず出てまいります(図3右上)。先ほどの梅原先生の資料にもあった地図では、なんと1489年という遅くなってまで、ほとんどプトレマイオスと変わらないインド認識がつづいているのです。つまり東にガンガーが流れ、西にインダスが流れ、そして南にインド洋が広がっている。そこに何本も川が流れ込んでいるのですが、この何本も流れ込んでいる川は、形はおかしいですが南インドの半島部のさまざまな川を意識していた可能性がある。つまり、のちの歴史学者は南インドをあまり問題にしないのですが、プトレマイオスはもう既に、南インドに川が流れ込んでいるベンガル湾やインド洋、西のほうではアラビア海、そこに流れ込む大河を意識していたというのは面白いところです。

それから、インド人はもっと抽象的な、面白い考え方をします。古代叙事詩の『マハーバーラタ』ではこういうふうな切り方をして(図3左下)、真ん中に中インドを据えてまわりに三角を置いた。またヴァラーハミヒラという人はインド世界をきれいなハスの花になぞらえて、8弁の蓮華を中心に向けてくっ付けてインド世界を表す(図3右下)。つまりこれが一つの宇宙的な曼荼羅になっているというとらえ方をしていたことが注目されます。

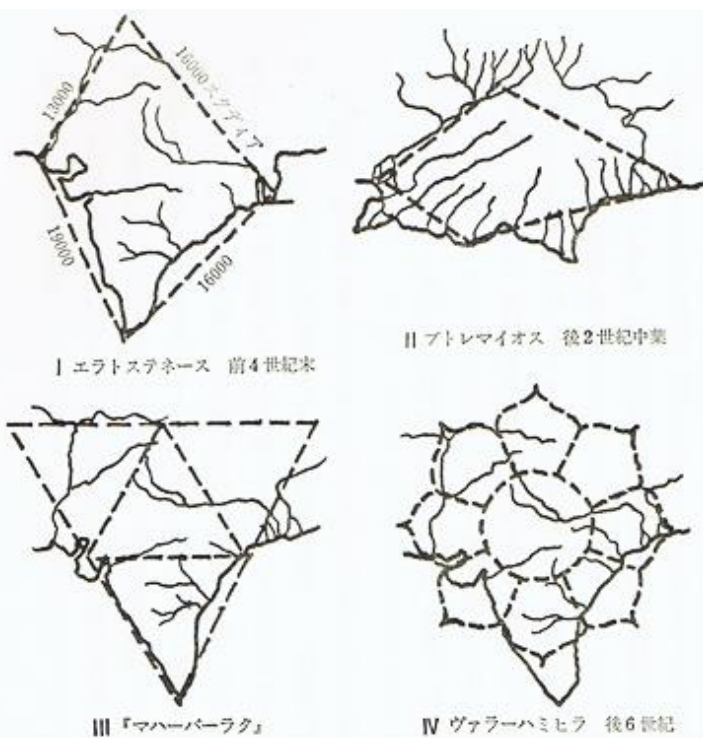


図3 古代インドの地理学的イメージ

(カニングハム『古代インド地誌』による)

[小西 1981]

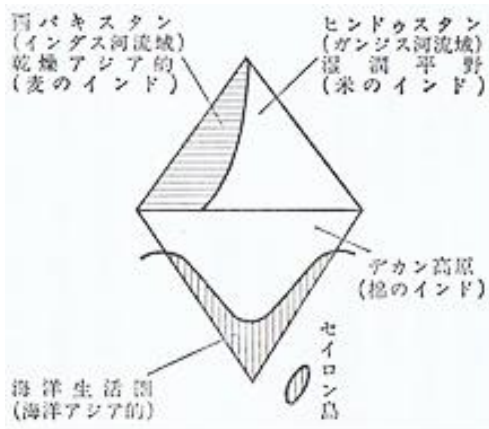


図4 インド亜大陸の史的構造
(松田寿男氏原図) [松田 1971]

それはともかくとして、問題は先ほどの乾燥アジアと湿潤アジア。それを整理しますと、松田先生は図4にあるように、今日のパキスタンのほとんどが入るインダス川の流域と、インド側のヒンドゥスターン平原、この2つに北半分が分かれるだろうと。そして、インド世界が今も北インドと南インドに分けられるということ自体には異論はなかったのですが、ここでは北をさらに2つに分けた。そして、その西側が乾燥アジア的「麦のインド」、そして東側が湿潤平野で「米のインド」。南のほうが面白いです。これをどういうふうにかけるかがこれからの大きな問題になるわけですが、初めて「海洋生活圏」というものを、この半島部

の南インドの海岸に面したところ、ぐるりとベルト状にこの海域を、海に面した地域とに設定したわけです。海洋アジア的というか、そういう海との交渉を持った生活圏というものとしてとらえた。これは大変重要な見識だと思います。

ただ、南インドの内陸部を「綿のインド」としてしまっただけはちょっとどうなのかなという。南をどうするかというのは本当に誰もが苦勞しているところです。インド考古学の泰斗、オールチンという人がケンブリッジにおられますが、この人は特に北のほうで面白い説を出してまいりました。図5は私なりに整理したものですけれど、北にはヒマラヤ山脈に囲まれ、西側はカラーコラム・ヒンドークシュからスレイマーン・キールタル山脈に囲まれたベルトがある。ここをよそからの文化を受け入れるフロンティア地区として、I a、I b、I c、I d というふうに分けました。そして内陸ではII a がガンダーラ地方とインダス平原、II b のガンガー平原。さらに、これは初めて出てくる地域なのですが、II d があります。ここは地形的に言うとなディヤ山脈だとかがある中部山地で、人類学的にも考古学的にも非常に豊かなところでありました。ただ、ここはまったく大王朝が展開したことがない、いわば遅れた地域だと言われてきたところですが、そのように遅れたと言い切ってしまうことのできない辺境だからこそ、そこから全体が見えてくるような大変重要な周辺地域であると、以前から私も考えていたことであります。

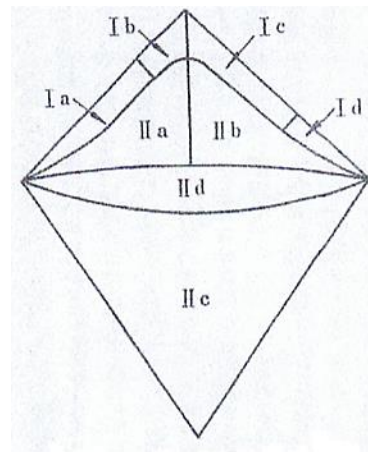


図5
オールチンのとらえた亜大陸の地域区分 [小西 1981]

したがって、それを踏まえ、さらに 86 年まで下りますが、私が作った図が、このひし形の中にいろいろな三角や線が描き込まれた、I からIVまで大きく分けた地域と、それぞれをさらに a から c などへと分けた図であります (図6)。

このような文化領域の中でも、特に人とモノの移動によって文化変容を強く促した地域が、フロンティアの中でも I a が重要です。ここには有名なハイバル峠もありますし、さらに南の

ほうにも西からのいろいろな文化の入り口、玄関があって、ここは非常に活発に、内陸の文化展開を促したところだったのです。

しかし、これはいわば陸のシルクロードの通り道として大変重要なところとされてきたところですが、それだけで説明が付くかと言えばそうではないと。なかなか難しいところもあるのですが、北東の I b に走るヒマーラヤ山脈。たしかに越えにくいところですが、私は一方で、最近本にまとめた『手すき紙の歴史』(デリー刊、2013) という本に、チベットからネパールを通じてインド平原へインパクトを与えた紙の道、これが意外にもヒマーラヤを越えて南に入ってくるという可能性についてふれました。8,000メートル級の山も越えてくるという、ちょっと考えられないような動きもありまして、しかも、驚いたのは、カシミールでフィールド調査をやっておりましたときに、その人たちの祖先がサマルカンドのほうからやってきたというからすごい。どうやってパミール高原を越えて、サマルカンドからカシミールまでやってきたのだろうと。そういうルートすらあったということにびっくりしたわけです。

また、いわゆる北のほうをインダス平原とガンガー平原、II a と II b に分けることには問題がないのですが、私はやっぱりここに II c という、a にも b にも入らない内奥の一角を置くべきだと考えました。アジ研の所員でもある、竹中千春さんが『盗賊のインド史』(有志舎、2010) を書かれましたが、ダークと呼ばれる盗賊・殺人集団が活躍するのはここです。全く王朝が形成されない、むしろ王朝に対してゲリラ活動を行っていくような連中が巣くっているところ。もしくは、王朝がつぶされて一旦ここへ引き揚げて、そこで力をためて何とか巻き返してやろうというような力がそこに集まっているというような特別なところですので、私はここに II a、II b とは違う II c を設けておきたいと思ったわけです。

オールチンさんも II d として設定いたしました中部山地、これはむしろその両端で海に大きく開けていた。私が III としてクサビ型に描きましたこの地域の西側が、ことに活発にいろいろな動きをするわけです。海に開けたというだけでなく、ちょうど北と南のそれぞれの文明・文化が行き来したコリドー、すなわち回廊であったと歴史的にも考えられますので、あえて III というクサビ形の地域をここに置いたわけです。

南方では、I c、I d とした海に沿ってぐるりと広がっているベルトがあり、その重要性は言うまでもない。先ほどポピュラーな言い方でシルクロードという言葉を使いましたが、陸のシルクロードに対する海のシルクロードという形で、I c は西のほうから、古くはメソポタミア文明とインダス文明の交流があったように、非常に古くからこの地域は、西からの文化をとらえた地域であったのです。

それに対し、南東の I d のほうは、ここから東南アジアに向けてさまざまな文化を発信して

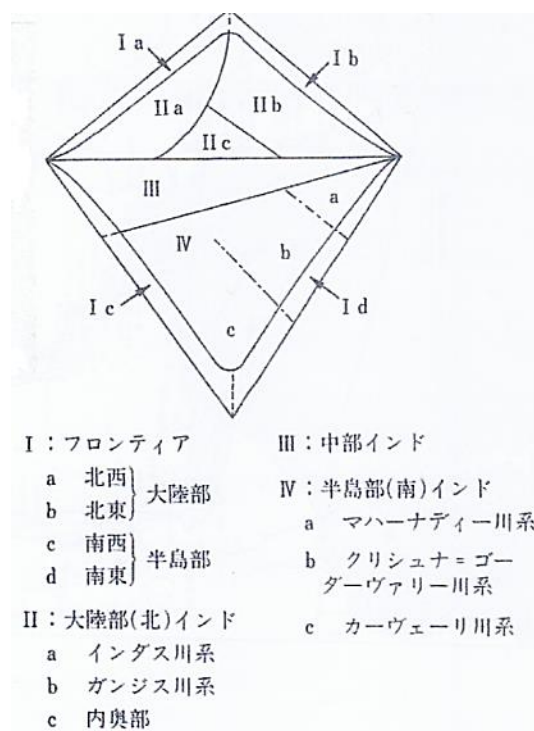


図6 インド亜大陸の文化領域区分

[小西 1986]

いく、そういう地域だった。そのためにはここでとりあえずIVとした南インドをただ一言でデカンと言ってしまふのではなく、どのようにこれを区切って考えていくのかということがまた大きな課題になります。私はここで半島部と呼んでいる南インドを河系で分けてみたい。これは北でもインダス河系と、ガンガー河系とに分けたように、北から順にマハーナディー、次いでクリシュナ・ゴダーヴァリー、これはさらに2つに分けても結構ですが、それから南のカーヴェーリ。これらの河系はそれぞれが独自の文化圏をなしているにしてもはっきりと分けられないので破線で分けていますが、実際にこれらの地域での文化の流れをみると、これはむしろ考古学的な証拠からいえることなのですが、上流のほうにその文化の発祥があって、下流、河口に向かうに従ってその文化が膨らんで、雪だるまのように大きくたくましくなっていくわけです。そしてその河口のところに、海に面した海港、海市、あるいは、港町ができます。それが発達して、後にそこで王朝を形成することにもなります。この海市、港市の発達とその背後の文化との関係というのは家島彦一先生や弘末雅士先生が立派なご本をお書きになっていて、まさにそのとおりのことであります。

そして、それぞれの河系の間には、そんなに高くはないのですが丘があったり山があったりということで、それを越えると文化ががらっと変わっていくということもあります。南はそこに注目しながら、もっと問題にしていけないのではないかと思います。

そういうわけで、非常に概念的な、しかも定規でもってえいやっと引いてしまったような図ですから、どこまで信用できるのかというのは私自身あまり自信がないのですが、だったらこれが実際のインドの地形と、また地域の歴史とどう重なり合わさるのかが問題です。それを考えたときに、この図の一番大きな欠点というのが、IIIの西の付け根のところあるいはIbとIIbが出会う、さまざまな文化がそこで吹きだまっている東インド一帯、ここにもっときちっと注目しなければいけないのではないかとすることに気が付いて、いろいろ調べ始めているところです。

殊に、海を通じてのさまざまな交易のあり方については、家島彦一先生の『海が創る文明』（朝日新聞社、1993）を初めとする一連の著書がありますが、8世紀から15世紀のインド洋海上ルートと主要な交易港を示す図を、**図7**として置きました。

ここではインドを図の中心に置いてくださっているのでわかりやすい図になっていますが、家島さんの専門分野は、どちらかというと西のほうの交易、アラビア海を通じての交易という仕事ですので、それでインド辺り、南アジア周辺を見ても、その西海岸、やや北のほうから言えば、グジャラート地方からずっと一番南端のケーララに至るまでのマラバル海岸に至るこの辺りのさまざまな港市、港町が航路上に書いてあります。

実際、やや北のほうから見てみますと、海に面したところはインダス川河口のシンド地方の南端ですが、ここからさらに、サウラーシュトラ半島-カーティヤール半島をちょっと回って、グジャラート地方のカンバーヤ、バルージュ（ブローチ）、スーラトに至るルートが見える。スーラトというところは後に東南アジアとの交易で日本にも影響を及ぼした更紗の語源となる地でもあると言われていて、古来大変重要な交易港であったわけです。

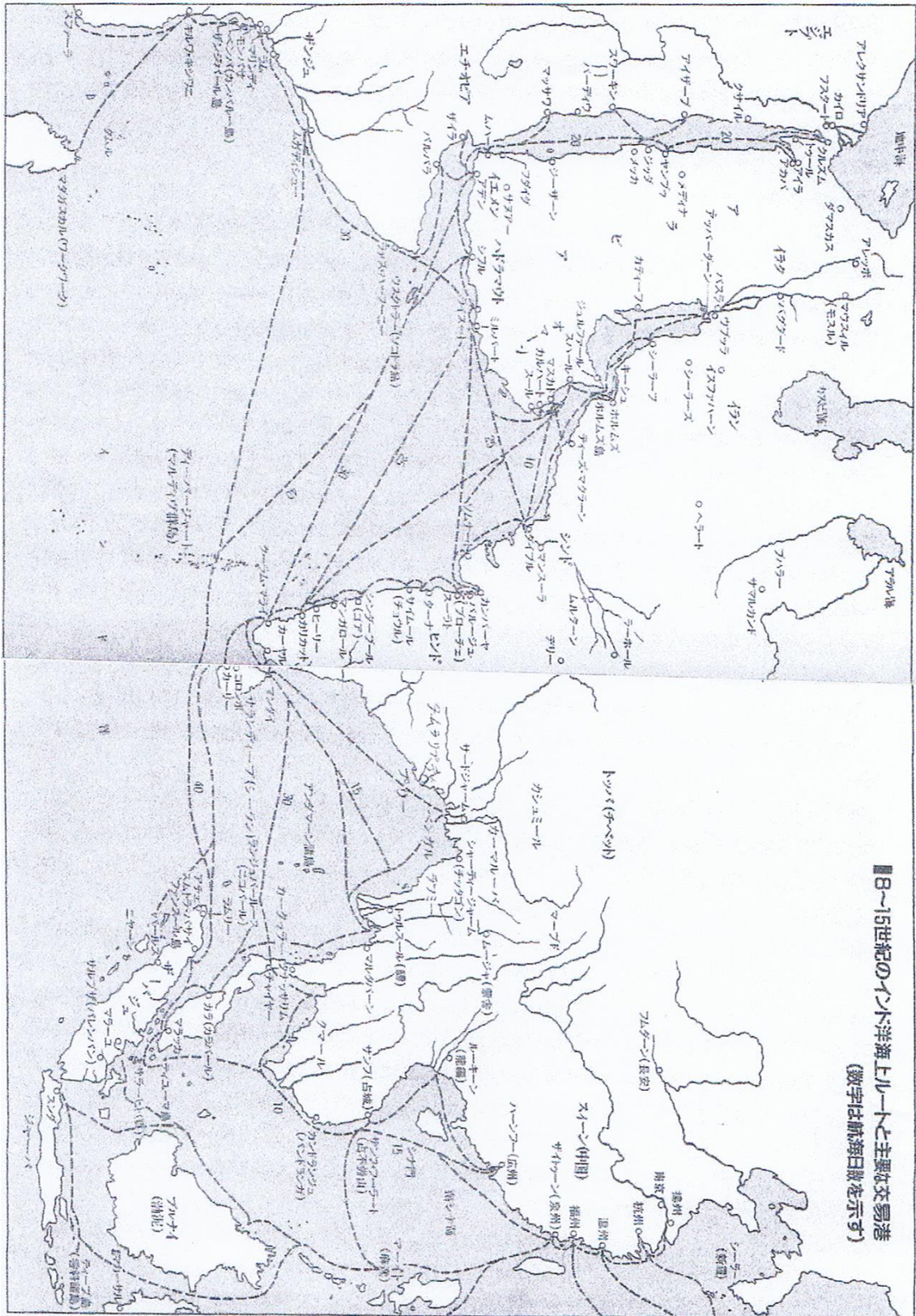


図7 8~15世紀のインド洋海上ルートと主要な交易港 [家島 1993] に小西加筆

そこからターナ。今のムンバイの近くです。この辺りぐらいまでを含めて、どうも一口に南インドの海域辺境とは言い切れない。これを一つの独立した海域文化圏としてここに設定することができるのではないか。そして、その歴史は、さらに南のマラバル海岸、コロマンデル海岸よりもずっと古い、インダス文明にまでさかのぼるのではというふうに考えられるのです。特にこのカンバーヤやまたはブローチ。すなわち英語にいうキャンベイ湾一帯には多くの遺跡があり、それらは遠くメソポタミアのほうとの交易の証拠を示しているのです。つまりその拠点を西からたどっていきますと、メソポタミアのほうではバスラとかシーラーフ、あるいはカティーフなどを通してホルムズ海峡を越し、マスカットやソファールというようなところも通り抜けて、今度は海を東へ渡ってダイブル、つまりインダス川河口に至る、そのような交易路があった。そして、インダスのほうからも、優れた物質文化やさまざまな物産が川を経て、川を下って海に出て、さらに、そこからメソポタミアに至る、またはメソポタミアから物資が海港にもたらされて、川をさかのぼっていく。このような双方向のメカニズムがあったと考えることができると思います。

つまりインダス文明というのは、普通河川文明、つまり河川を灌漑として利用した文明であるかのように考えられていますが、それもあったにしても、むしろ積載量からして牛車なんかよりもずっと大きい船、それに物資を積んで川を上り下りして、この河口の海市、海港で栄えていった、そういうメカニズムであったのではないかという気がします。

つまり典型的な海港、海市のあり方を考えると、物資が内陸から送られてきてそこにたまり、そしてこれが、そこで終点なのではなくて、そこからさらによその世界へ発信していく。またはよその世界からもさまざまな物資、人、物、情報というのがそこに集まって、そこでまた内陸のほうへとそれが伝えられていくという、まさにそういう、文化の終着駅であると同時にそこがスタート地点でもあると、そういう両面を持っているところだと思います。そうとすれば、どちらかという、南のマラバル海岸の典型的な海市であるサイムール、シンダーブール、あるいはゴア、マンガロール、そしてケーララの諸地方。このように、名前は出ておりますが、物資を受け取りはするけれど、そこから何か新たなものを発信していくような力は必ずしもこの海岸は持っていないのです。というのは、この海港のすぐ東側には西ガート山脈という山脈があつて、かなり帯状に狭い地域ですから、ここに大きな勢力はなかなかできにくい。むしろ山を越えれば、そこからさまざまな川が東に流れ出していくわけですが、その流れていく過程でさまざまな物資ないしは人、情報、物資を、方向としては南東に向けて、ベンガル湾に沿った河口へと運んでいく。そこで行きついたコロマンデル海岸では、南インドの大王朝が次々と出てくる。中でも有名なのは9-12世紀のチョーラ朝ですが、河口で大きな力をためたこういう王朝が、今度はそれを東南アジアに向けて発信していくということになるわけです。こうして東南アジアでインド化ないしはヒンドゥー化がはじまる。この枠組みにもいろいろ議論がありますが、その発信地となっていくのがベンガル湾に面したこのコロマンデル海岸であったということを忘れることができないと思います。

ただ、**図7**として挙げている地図で見ると、このコロマンデル海岸部、つまりインド半島の東側がちよっと白過ぎますね。もっと情報を入れたいと思って探したところ、南インド史研究では世界的な権威である辛島昇さんの編著書 [2007] によい地図がありました。**図8**は13世紀から17世紀の南インドの地図ですが、それを見ますと、かなり多くの海港の名前が出てまいります。中国資料から言ってもかなり古いところからこのような名前が出てまいりますし、



図8 13~17世紀の南インド・スリランカ
[辛島編 2007]

非常に活発な、東との、つまり中国とか東南アジアの諸地域との関係が広く深くあったことがこれからもわかるわけです。確かに上流のほうでも、コインバトールとか、マイソールとか重要な都市はあるのですが、東の海岸部、コロマンデル海岸にはチェンナイ(旧マドラス)周辺の、カーンチープラム、またポンディシェリー、ナーガパッティナム、タンジャーウル、マドゥライなど、いずれも王朝を形成していく大変重要な河口の港市が点在していることがおわかりいただけるかと思えます。

そして、この南の半島部の文化は、海へ流れていくだけでなく、陸のほうのルートも伝わって、マラバル海岸部の最南端のカニヤー・クマリ、つまり英語にいうコモリン岬にまで向けて流れていって、そこで独自の文化をここでも展開していきました。その意味で、南インドの何がどこで一番南インドらしい文化を展開しているかと言えば、このような点を見なければいけないと思えます。

この南インドの研究は、決して遅れているわけではないのですが、これまであまり多くの人の注目を集めてきませんでした。一つに、南インドに関する資料を読むに当たって、英語による資料ばかりに頼ってしまったということがあるものですから、地名の読み方一つ取っても随分おかしな読み方をしているわけです。昨今では次第に地名の読み方もきちんとした読み方に変わっておりますが、一部の地図ではカニヤー・クマリはいまだにコモリン岬です。またはクリシュナー川などは古い地図を見ると、キストナ川なんて言っている。キストナとクリシュナーは確かに発音によっては近いのかもしれませんが、元の意味は全然違ってしまいます。ただ、なかなか覚えられない、または舌をかみそうなようなものが出てまいります。やはりその元の意味が重要です。コモリン岬と言われるカニヤー・クマリとは、少女の女神のクマリを祭っているところという意味です。そのすぐ近くにティルヴァナンタプラムという、これもなかなか発音しにくいところがあるのですが、これが従来トリバンドラムと呼ばれてきたところ。コッチもかつてのコーチンで、コーリコードはカリカット。今の名前で見るとどこのことかと思うかもしれませんが、そういうような読み替えも含めて、きちっとした研究を進めていかなければならないと思えます。

このように、南インド半島部の海域ベルト地帯は、東と西とではずいぶん違うことには気を付けたい。またもうちょっと北東部、つまりオリッサからベンガル、アッサムにかけてのところというのもこの地図では抜けてしまっているのが問題です。このベンガル、アッサム地方と

いうところはやはり大変重要なところで、**図9**にはさまざまな産物名が書いてありますが、沈香、麝香、金銀、宝石、象牙、木材、綿布、サイの角、こういうようなものを取り扱った重要なところなんです。ですから、ここはひとまとめにして、ベンガル湾に面した海港を擁するベルトとして、より独立した地域として考えるべきではないかと思えます。

ちょうどそれと相対する格好で、西にありますシンド、グジャラート地方からは宝石、銀、綿布、染料、木材、砂糖、土器が運ばれる。恐らくこれは、この全てがインダス文明の時代にペルシア湾のほうへ運ばれていったであろうと思われまふ。特に、綿布はインダス文明が世界最古であると言われておりますし、木材もまた非常に重要だったのです。メソポタミア地方では木材がほとんど採れませんので、造船上もこれが大変重要であったろうと思われまふ。ですから、この地域も海のベルト内に一括してしまうことなく、独立してとらえていいのではないかと思えます。

ただ、この地域をも含めて、ぐるりとモルディブ、ラクシャディープというところ、さらにまたそこから南インドの辺り一帯までを含めた広域にわたる海域世界というものを、やはり見て取ることはできるわけで、特にモルディブ、ラクシャディープでは、ココヤシから油や繊維を取って珍重されております。タカラガイ、アンバー香、乾燥魚、べつ甲というものも、この地域の重要な産物です。

それから、ちょっと領域がクロスしておりますが、シンド、グジャラート、またはペルシア湾からずっと伸びた海域が、南インドのスリランカを含み込んで、ここでは各種の宝石、またはジンコウ（沈香）、ダンコウ（壇香）、コショウ（胡椒）、ニッケイ（肉桂）、カルダモン、ジンジャー、木材、織物、米、象牙、熱帯植物、果実、砂糖、ココヤシが主な商品です。中でもスパイスが非常に多い。もちろんスパイスとしては、ジャワのコショウとか、マライ・スマトラ産のものとも重なりますが、ここでもその主要な産物として大きな役割を果たしてきたのです。

そう見てきますと、ベンガル、アッサムのほうから南方に回り込んでいるベンガル湾海域世界（ここでは**図9**中の②とされた海域世界）と、その西側のインド洋の西方の海域世界の①という広がりとは、ある意味では南インド、スリランカとここでもって一緒になって重なっているということが重要で、南インドとスリランカというのはそれだけ豊かなのです。それから、モルディブ、ラクシャディープ、ここではイスラーム商人が非常に積極的に活躍いたしまして、アラビア海を航行するダウという船をあやつった。木造帆船ですけれども、これが東アフリカのほうまで行って、そこでは奴隷が重要な取引の商品であったということとか、ソコトラとかエチオピアのほうまでダウは活躍して出ていっております。またそれより逆に、さらに東のほうに行くとジャンクと呼ばれた帆船が、一番遠いところでは広州、泉州というところにまで出掛けていっておりますし、ビルマ、インドネシア、フィリピン、マレー、スマトラ。そして香料諸島、ジャワというようなところにまで届いていた。こんなようなスケールの大きな世界地図が書けるのだということです。

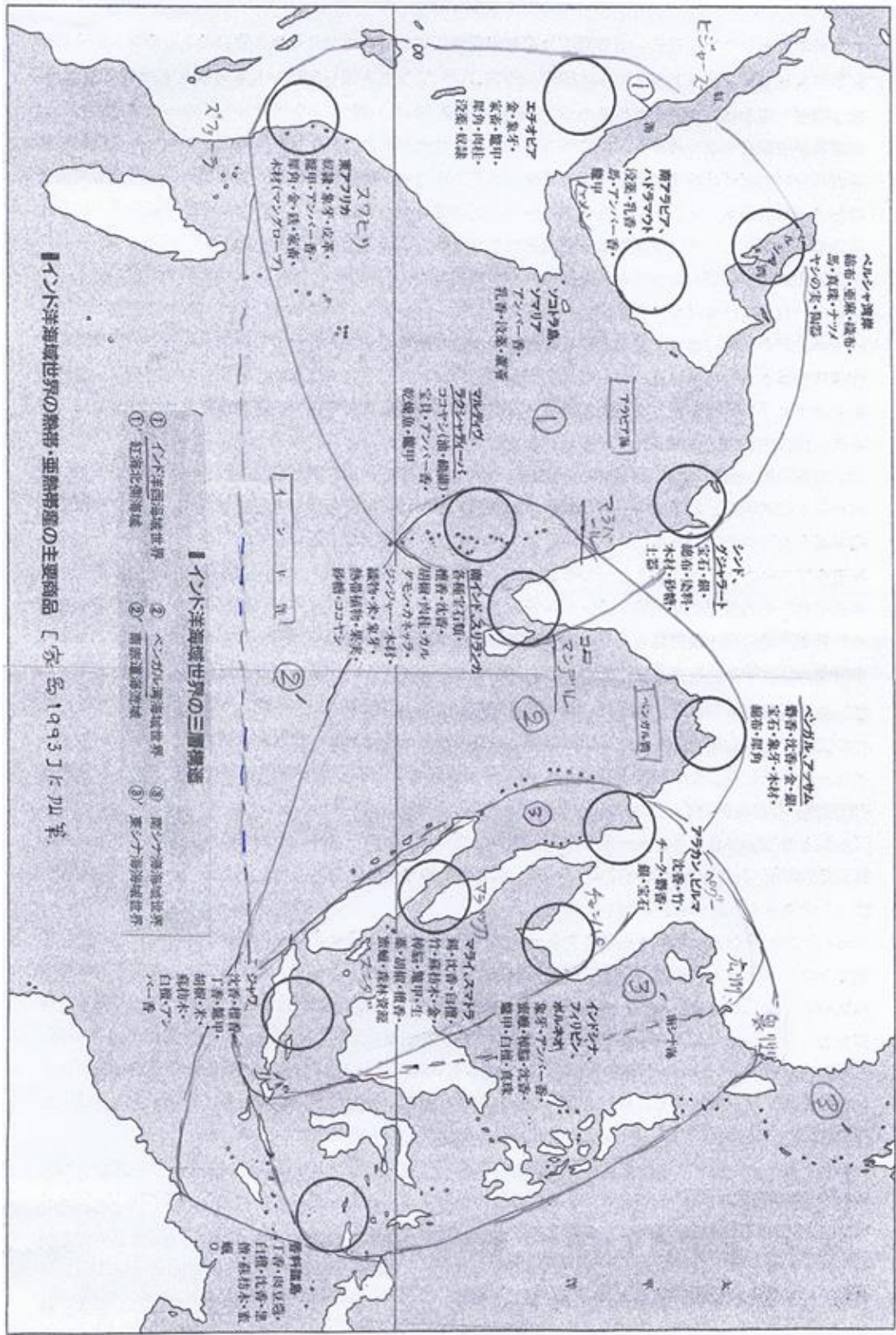


図9 インド洋海域世界の熱帯・亜熱帯産の主要商品 [家島 1993] に小西加筆

以上をまとめてみましょう。定規で引いたような先ほどの概念図(図6)をもう少し現実のインドの地図に重ね合わせて考えてみますと、図10のようなことになるのではないかと思います。ここでもまず、北インド、南インドという分け方をしていますが、単純な二分は避けています。例えば、北インドといえばこれまではイメージとして、インドアリア系の言葉が話しているところというふうに見ていたわけです。ところが、グジャラートという、先程見たこの西の端、またはベンガル、オリッサ、またはバングラデシュというところで話しているオリヤー語、ベンガル語、いずれもこれらはインドアリア系の言葉であるにも関わらず、その文化

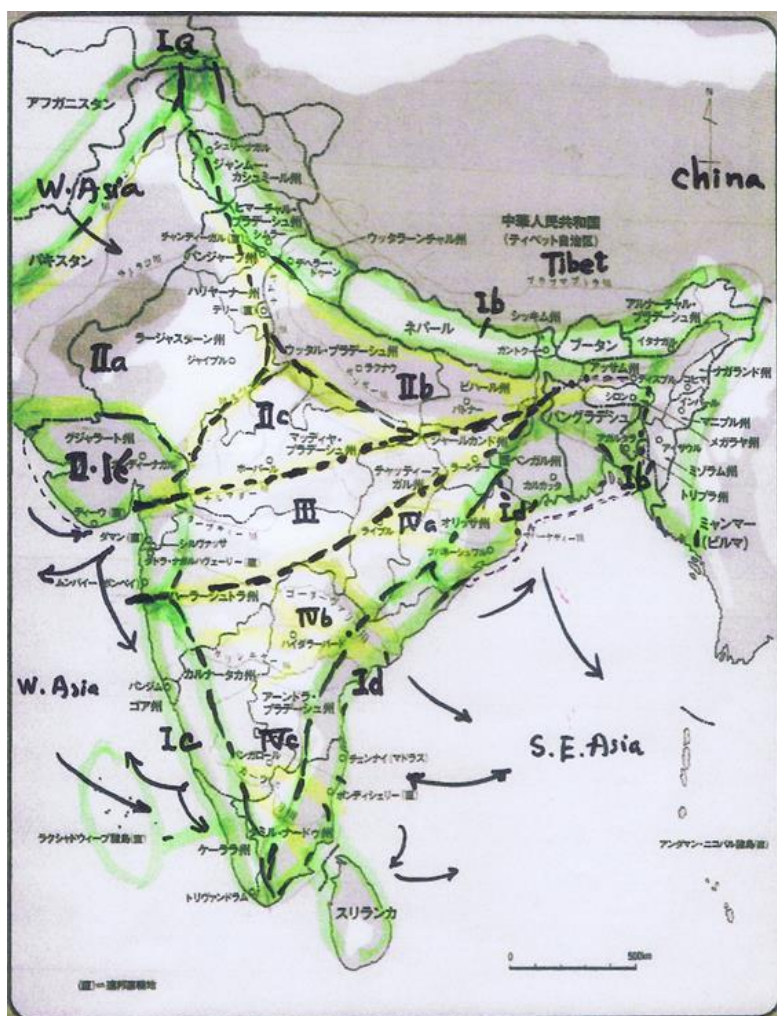


図10

内容を見ると、それはいわゆる北のアーリア系の文化とはかなり違った、さまざまな文化が吹きだまった、しかもそこから海港、海市を発達させた文化の発信地としての役割を、内陸の北以上に持っていたのではないかと思います。私には思えるわけでありませぬ。

特に、バングラデシュというところ、またはベンガル、オリッサでは(これも今ではオリッサとは言わずオディシャーと言うのですが)、その内陸の山岳地帯には原住民がまだに住んでいます。この古層の文化と、もっと南から伝わってくるドラヴィダ文化、また北西から伝わってくるアーリア文化と、この3つが全部一緒になって吹きだまっている、そういう文化の重層性が見られる重要なところであるというふうには思えてなりません。私がカルカッタ大学で勉強したからそう思うのかもしれませんが、ベンガルの重要性というものはとても大きいのではないかと思います。

したがって、ちょっとああいふふうには線でばつと引いてしまうようなものにはならない、より具体的な、現実的な図ができてくるのではないかと。しかし、基本的には、私が1986年に書きましたこの図を基本的に踏まえながらも、それぞれの地域を位置付けたあらかたな地図が必要なのではないかと思ひます。つまり、内陸に位置する陸の道としてはなお、この内陸のフロンティアである Ia、Ib という北の屏風のような障壁、その中にはヒマラヤ山脈という非常に

大きなものがどんとあるわけですが、それが平地に降りるとインダス平原のⅡa、さらにガンガー平原のⅡb、そしてそれに囲まれ、やや辺境地帯のⅡc という内奥の地域。そして、その東、西の両端にベンガル・オリッサ及びグジャラート・シンドというような領域の塊がどんとあって、さらにそこから、海との関係を非常に強く持ったベルト状のⅠc のマラバル海岸とⅠd のコロマンデル海岸に、港市を展開させている。特にⅠd の領域では、強力な王朝をも次々と打ち立てていった、そういう豊かな地域であったのです。そして、Ⅰc とⅠd の両方を結び付け、結び合わせるような形として最南端のケーララ、またはタミル・ナードゥ州の南端地域があり、南方の諸文化を統合していったということに注目したいと思います。さらにこの図ではそのさいのモノ・人・情報の動き、あるいは船や物資の動きをかなり思いきって矢印で書いてしまいましたが、どこからどのように文化が入ってきて、どこへ流れていくかというようなことを、はなはだ大ざっぱながら、ここから見ていくことができるだろうと思います。

もちろん大変これは、先に漫談みたいなものと申しましたけれど、一つの考え方、または妄想でありまして、ここからさらに、例えば家島先生や弘末先生が書かれているように一つ一つの海港、海市の果たした歴史的な役割や歴史的展開、またはそこで扱われた物資のあり方というものを、こうしたある種の枠組みを頭に置いた上で考えてみても悪くはないと思います。そしてさらに、その枠組みの中で事実関係を細かく検証していくことが、今後はさらに大事なのではないかと考えております。

上田：どうもありがとうございました。では事実確認などがありましたらお願いします。

聴講者 A：コロマンデル海岸とマラバル海岸がフロンティアっていうのはどういう意味で使っているのでしょうか。一般的にはフロンティアというと開拓最前線のことですが。

小西：外の世界に向けて、一番外界のへりをなしているという意味です。ここでは北では山脈、南では大海というインド亜大陸の「境界領域」をさし、必ずしも「開拓」の意味は含んでいません。

聴講者 B：コロマンデル海岸の河口港市付近では農業も盛んだったのでしょうか。それとも、農業は川の上流部に限られますか。

小西：いえ、河口でもお米がとれました。確かにだんだんと下流に行くに従って、地味も豊かになってはきます。ここではお話しませんでしたけれども、ちょうどモンスーンの影響が一番受けるところは東ガート山脈の東と西ガート山脈の西、そこに雨がどっと降って、米ができるわけです。これだけたくさん米ができる場所というのはほかにはなくて、中部インドでは雑穀が主ですし、あとは小麦ですから。主食はほとんどが小麦です。だから、ライスカレーなどと言いますが、ライスはほとんど食べていないのです。基本的には小麦を食べている世界です。

特に、ここの西ガート山脈はアラビア海を渡ってくる南西モンスーンがこの山脈にぶつかって雨をそこで降らしてしまふ。それでマラバル海岸は非常に高温多湿で、米とココヤシが盛んに栽培されるわけですが、そこを越した内陸部では雨量が年間降雨量 600 ミリから 800 ミリぐらいにとどまります。むしろ非常に乾いています。ですから、デカン高原なんて言うとは何だ

か白樺林があるような、そういうイメージですけど、全然そうではなくて、もうサバンナの荒れた風景、そこで細々と雑穀と綿を作っているという程度の風土です。そして下流に行くに従って、東ガート山脈を越えれば、今度は季節によって違いますけれども、北東モンスーンの影響がありますから、そこで稲作の米がとれるのです。

聴講者 C: インダス川のところで、一般的な平地では水の利用について灌漑が注目されており、必ずしも水運ということに注目されてこなかったというお話があったと思います。例えばアフリカ大陸ですと地理的制約で結構下流に急流や滝があり、ニジェール川にしても、ザンベジ川にしても、オレンジ川にしても、あまり水運には利用できません。しかしインドの場合はインダスもガンガーも、あるいは Id 地域にたくさん流れこんでいると言われていた川も、そういう制約はあまりなかった。水運利用がしやすく、事実利用していたと、そういう理解でいいのでしょうか。

小西: インダス川では、川をせき止めているような滝ですとか、または落差のある地形というのはほとんどなく、ただただ平らです。そこに洪水が起こっても、また土をためていきます。洪水でたまった泥土は水をたっぷり含んでおり、水が引いた後そこで農耕を行うわけです。灌漑を引いてそこで作物を作るようなことすら必要ありません。滝になるような落差もできず、完全に平らになってしまっただけで前の流路がどこだったかももうわからない。そういう地形なのです。

聴講者 D: ちょっと感銘を受けながら聞いていました。今のところに関連して、日本の江戸時代の運輸というのは、実は舟運が主です。教科書レベルだと、日本の交通って海と海運と、五街道などの街道でしか語らないのですが、実は近世という時代は川の港の時代で、近世の初めに河岸っていう名前もできたのです。川に河岸ができて、だから陸の陸路と海をつないでいるのは舟運なのです。大正ぐらいになると舟運がトラック運送へ変わっていき、更に鉄道に変わっていくのですが、それまでは河岸ってのがごく普通であった。そういうことは教科書なんかではほとんど落としているってことを思い出しながら、このお話を聞いて「ああ、そうなんだ」と思いました。

小西: ありがとうございます。舟運ってのはとっても大事で、実は私が今住んでいるところが江戸時代の利根川の河岸なのです。ですから、うちの周りを起点にして、利根川べりを行ったり来たりしながら、河岸・津のいくつかをだいたい調べております。とても面白い。今でもそういう運河が大事で、ダシと呼ばれる階段があって、船が着く。そして、米やしょうゆを積み、あるいは下ろして、銚子と江戸を結ぶというような、そのような河岸が、利根川を利用しながらたくさんあるということに気が付いて、少しずつ調べています。

また海に出たものは北前船のようにさらに北へ進むために積みかえられて、またより荒い海へも出ていくのですが、それを支えていたのはもっと小さな川の舟運であり、そのための河岸があったということをお話は実感しております。

上田: どうもありがとうございました。

参考・引用文献

- NHK 取材班ほか『海のシルクロード2』日本放送出版協会、1988
- 辛島昇・大村次郷『海のシルクロード—中国・泉州からイスタンブールまで』集英社、2000
- 辛島昇編『南アジア史3—南インド』山川出版社、2007
- 小西正捷『多様のインド世界』三省堂、1981
- 小西正捷『インド民衆の文化誌』法政大学出版局、1986
- 松田壽男『アジアの歴史』NHK 市民大学叢書 21、日本放送出版協会、1971
- 宮崎正勝『海からの世界史』角川選書 383、角川書店、2005
- 家島彦一『海が作る文明—インド洋海域世界の歴史』朝日新聞社、1993
- KONISHI, M. A. *Hāth Kāghaz : History of Handmade Paper in South Asia*,
New Delhi: Aryan Books International, 2013

おわりに

上田：今回は海域学の研究助成を得ておりまして、こちらから海というものと接点をつなぎながら、これまでも研究ということとつながりという形で話をさせていただいたわけですが、全体的話を聞いて何か発言、あるいは3人の先生方に共通するようなトピックで何か発言いただければと思いますが、いかがでしょうか。

聴講者 A：青柳先生もおっしゃられました南洋という言葉に含まれる、日本人の持っているイメージについてお伺いします。東南アジア、太平洋も含む概念として日本人は南洋という言葉を使ったのですが、そうすると南洋は、いわゆる東洋ではなく、アジアでないこととなります。そのときに、南アジアのほうは果たして東洋なのかどうか。小西先生がお話しされましたけど、南洋とアジアというものの違いは、どういうふうなものとして考えたらよろしいでしょうか。

青柳：南洋という言葉自体は非常に漠然としていて、南進論の中にはときにオーストラリア、ニュージーランドまで含めて南洋で、ここまで行かなくちゃいけないと言っている人もいます。ただ、南洋群島という言葉を使い出すと、これはもう明らかに委任統治をしている、ミクロネシアのこの地域だけを指しています。

特に、後期になってきますと、日本の戦略という意味で、ここの部分を内南洋と言うようになります。そして、それからもっと南に関しては外南洋という言葉を使いまして、内南洋だけにとどまっているわけではなく、外南洋までも進出しなければ日本の生きてく道はないというような議論になっていきます。その場合の外南洋はこちらまで含めて言っていると思います。ただ、どこからどこまでを外南洋というような定義は多分ないと思います。

小西：もう一つ気を付けなければいけないのは、「南海」という言葉です。特にインドとくっ付けて言う場合には、「印度南海」という両方合わせて言ったりすることもあります。その場合のインドはもちろん漢字の「印度」ですが、非常にそれも漠然とした言い方で、ちょうど中国の中原からさらに西方を「西域」と呼ぶように非常に漠然とした言い方と同じです。このような「南海」という言葉は、研究書としても、昭和18年ぐらいにどんどん出てくる本のほとんどが「印度南海」という言葉を使っています。

それから、むしろインドをあらわす古い言葉は「天竺」ですよね。天竺と南海をくっ付けて使うことはありませんが、南アジアとかインドという言葉はむしろ、ずっと後になって出てくると思います。

青柳：既にお亡くなりになっていますが、矢野先生って京都大学の方がいろいろ南進に関する資料を抜粋して集めておられまして、そこでは南洋、南進、島だけではなくて、オーストラリア、ニュージーランドあたりまで話をしている人たちが結構おります。

聴講者 B：小西先生の「印度南海」というのは、どういう文脈でそういう発言が出てくるのですか。

小西：印度と南海を2つくっ付けて言うようになっていったのは、恐らく大東亜共栄圏との関係もあるのではないのでしょうか。大東亜共栄圏と言うためにはインドまで含んで、自分たちはこれを解放するのだ、そして、アジアの盟主になるのだ、というようなイデオロギーが背後にあるのではないかなという気がします。したがって、インパール作戦なんていうのは、まさにインド世界へ侵攻していく重要な入り口だったのではないのでしょうか。

聴講者 C：私はラテンアメリカをやっているものですから、きょうのお話聞いていて、いろんなところでつながりがある面白いと思うことがいくつかありました。例えば青柳先生の日本が夢見た南洋というところなのですが、これはちょうど1920年代の後半、昭和の初めから30年代の頭くらいまで、盛んにブラジル、アマゾンに身を振り出していました。そのとき新聞などで、移植民学校の校長などが教育をしてブラジルに送り出すときには、青柳先生がお話された井上雅二の南進論のような言説が延々と並ぶのです。そういう意味でいうと、明治からずっと日本人のこの時期の心象っていうのでしょうか、そういったものがあまり変わってないなっていうのを思いました。

それと同時に、ブラジルに移民した人を再移住させるという、南洋再移住論が盛んにブラジルの中で起きてきているのです。ブラジル自身は日本と敵対するわけですが、そういう中で南洋にもう一度我々が戻って、我々が熱帯農業の指導をするリーダーになるのだというようなことを言う奴がいっぱい出てくるのです。これは帰るお金もないので実現はしなかったのですが、この南洋再移住論は一時期すごく出されたのです。そういう意味では、日本が夢見たのですが、きっと日本から出た移民たちも当時夢見たところだったっていうので、何かつながりがあるなと思って思いました。

それから梅原先生のお話の中で、スペインとポルトガルがフィリピンの領有をめぐるいろいろなやり合ったトルデシヤス条約の話が出ていたのですが、あれはブラジルをちょうど通っています。今のブラジルの領土を見ると、実際には内陸までものすごく大きく入り込んでいます。それはひとつにはポルトガルが一時スペインに併合されてなくなってしまったという事実をうまく使い、ポルトガルがどんどん中に入っていったからと言われていています。そうすると、フィリピンの領有をめぐる時もポルトガルとスペインはお互いやり合ったと思う。一時期ポルトガルがスペインに併合され、事実上表に出てこなくなるときにはどうなっていたのか。もし何かあったらと思って聞いていたのですが。

梅原：ポルトガルとスペインの対峙というのは非常に微妙なもので、王家は互いに娘を嫁に出したり、婿を取ったりしているので王室はつながっています。ですから、ポルトガル人とスペイン人っていうのはもろに攻撃して相手を倒すというようなことは非常に心が痛んでできかねる。しかも、お互いに当時のカソリック王国です。キリスト教徒が異教徒ではなくキリスト教徒を倒すというのはあってはならないことです。「やるぞ、やるぞ」と言いますが、その実行には何か理屈が必要です。下手をするとやった方が批判の対象になってしまいます。非常に微妙な関係です。最終的には、フェリペ2世治世の最後の段階でポルトガルを併合してしまいます。その結果、モルッカ諸島のチドール島もテルナテ島もスペインの影響下に入ります。しかし、その後はモルッカの価値がだんだん減ってきました。だから、両国がモルッカ諸島を巡って争っていたのは1520代から70年代までの40~50年間だけです。

聴講者 D: 17 世紀に入ると、オランダが進出してきてモルッカを押さえる。完全に制海権を握る。それで個別にポルトガルに拠点を叩いていく。17 世紀に入ると、また様子が変わりますね。

梅原: 17 世紀にはオランダとイギリスのアジア進出が強大になり、逆にスペインは衰退に向かっています。

青柳: ミクロネシアもスペインが最初来るのですが、ほとんどカトリックのお坊さんしか来なくて、あまり関心を持たなかった。マリアナでは衝突があったのですが、パラオでは政治的・軍事的問題は起きていません。

上田: ほかにいかがでしょうか。

聴講者 E: 梅原先生にお聞きします。フィリピンにはたくさん島があるので、小さな船による近距離の移動は昔からあったと思うのですが、長距離の船が入れる港を作ろうとすると地理的な条件が加わってくる。そうすると、長距離用の大きい船が入れる港がその後発展するようになるなど、フィリピンの街の発展に関して影響は何かあったのでしょうか。

梅原: いろいろ調べてみますと、フィリピン群島の大きな町、港市というのは、マニラとは違う別のところにありました。一つはミンダナオ島東部のブトゥアンです。ここはかつてチャンパーと深い通称関係を持っていました。11 世紀初めには中国に朝貢していました。また、そのころ南部ルソンとミンドロ島辺りにマイという大きな国があって、その重要港がミンドロ島北岸、今のプエルトガレラ辺りにあった、と考えられます。それから、もう一つはスールー諸島のホロです。

マニラの北にはトンドというところがあり、ここもまた 10 世紀ごろの碑文にその名前が見られます。しかし、当時ブトゥアンのほうにシュリビジャヤから派遣された重要な人物がいて、トンドにいたのはその一段格下の人物であったという話があります。どうもブトゥアンがトンドよりも交易上一枚上であったようです。中国船はこの時期（11・12 世紀）からブトゥアンに出入りしています。ブトゥアンのすぐ東側には山脈がありますが、そこに金鉱が幾つもあり、川下から砂金が取れます。昔から金の産地でした。そういった事情を考えますと、15・16 世紀はセブあるいはマニラがだんだんと重要になってくる時期でしょうが、それ以前は群島の重要港市の配置が違ったのではないかなと思います。

いずれにしても、船が大型化して港の地理的条件がそぐわなくなり、港の位置が動くというのは、その通りだと思います。ただし多くが河口港ですから、大河の場合長い年月で土砂の堆積が進み、港の盛衰に影響が出てくるケースは認められます。

聴講者 D: マニラがマニラになるのはいつごろなのでしょう。一応中心になっていくのは。

梅原: スペインがやってきてから。と考えていいと思います。先程も言いましたように、スペイン到来時にマニラはブルネイ王国の交易前哨基地として栄えていました。

聴講者 E：それは総督とか置くわけですか。

梅原：そうです。

聴講者 D：ガレオン貿易でアカプルコとマニラを結ぶ定期航路が作られるわけですね。

小西：大きな港を作れるという話に関連して。ボンベイは今は名前を変えてしまいましたが、ボン・バイアというポルトガル語は、本来よい港という意味から来た名だそうです。それがムンバイーになったのは、全然語源が違うのです。音は似ていますけれど、その辺り一帯に住むコーリーという先住民が祭っていた女神がムンバ・デービーという女神。そのムンバ・デービーの町という意味でムンバイーという名に変えたわけです。ですから、ボン・バイアとは語源から全然違う。ダルエッサラムもそうですね。平安の港という意味です。

上田：きょうのお話は大変インパクトのある話でした。マゼラン隊が貿易風で偶然フィリピンに、何かダーツを投げるような感じでぼんぼんぼんと刺さって、どこに最初に刺さるかによって、その後の歴史の展開が微妙に違ってくるということですね。そういった意味で言うと、前近代の場合、風と船の形状と風向きの変化というようなものがどういうふうに歴史の具体的な状況に影響を与えていくのか。港の形成なども含めていろいろ考えられるのかなと思いました。

それでは、本当に3先生方、どうもありがとうございました。